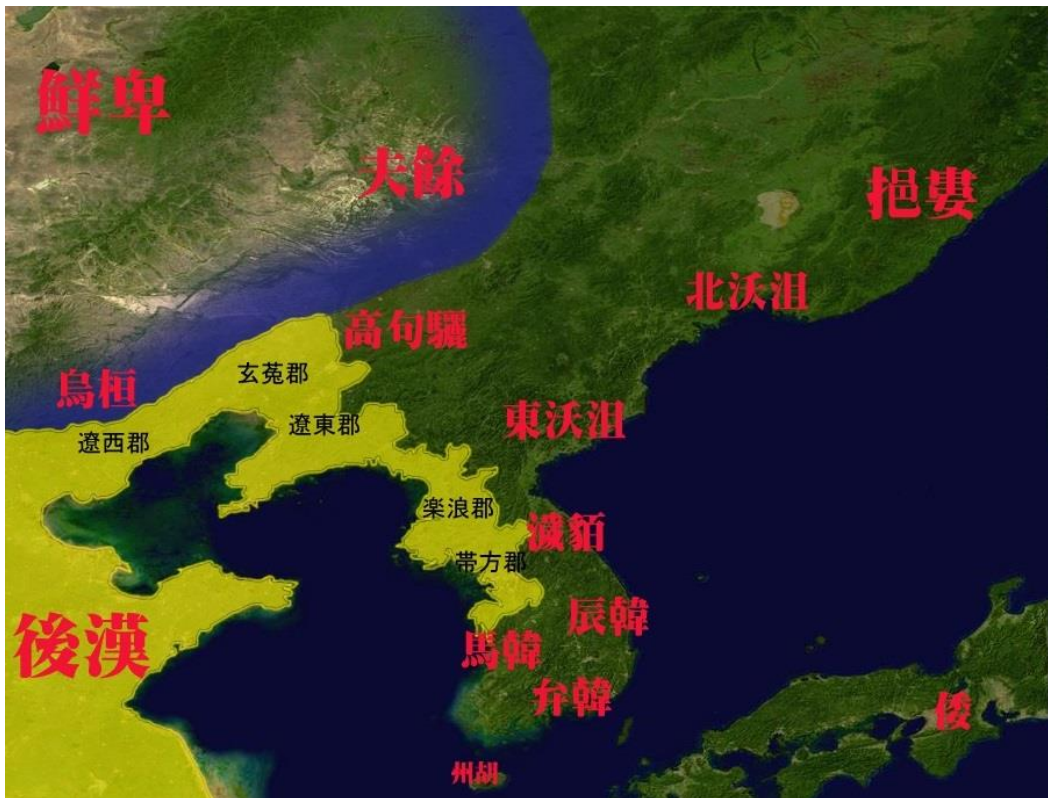


# 正史を彷徨う

## Part II

森隆一



2世紀頃の東夷諸国 (Wiki「東夷」より)

## Part II 序

Part I では、後漢書・三国志魏書・晋書の倭人条から倭を考えた。この時、高句麗条や韓条の記事の幾つかを引用をした。また、宋書の記事から、倭王が要求した爵位も考慮した。これらから、さらなる考察には韓条や高句麗条の記事も必要となると考える。

ここでは、まず韓条を大雑把に見ていくことにする。韓条が書かれているは上記3書である。

その後、唐までの中国の王朝を簡単に眺めることにする。引き続き、東夷諸国・朝鮮の王朝と朝鮮四郡を見ていく。こちらは、基本的にはWikipedia から、適当な記事を選択引用することですませる。

東夷が書かれている列伝は後漢書では東夷伝であるが、三国志では魏書三十烏丸鮮卑東夷伝、晋書では四夷伝のように正式名は書により異なっている。ここではよく知られている東夷伝で呼ぶことにする。

正史の記事で、既に訳があるものや文中での引用などは、引用文の後に (史): 史記、(漢): 漢書、(後漢): 後漢書、(三): 三国志、

(晋): 晋書 のように簡略に書くことも導入していく。

また、訳文のフォントを 1 段階小さくした。

Part I での疑問・作業仮説・図・表の番号に I を付けることにする。例えば、Part I の疑問 2 は疑問 I02、疑問 12 は I12 とする。

## 4. 韓

韓条のあるのは後漢書・三国志魏書・晋書の3書で、各書は、

韓全体→馬韓→辰韓→弁辰

の順に書かれているが、辰韓と弁辰には混在が見られる書もある。

各王朝の存在期間は、後漢は25年から220年まで、魏は220年から265年まで、晋は265年から317年までである。この間、曹操が丞相となったのは建安13年208で、魏王となったのは建安21年216である。また、司馬昭が相国となったのは甘露5年260である。313年には高句麗が楽浪郡・帯方郡を滅ぼした。ここで、韓は滅び、百済と新羅の時代となる。

なお、3書の成立は、三国志が280年頃、後漢書が432年、晋書が648年である。

史記では東夷伝はなく、代わりに朝鮮列伝がある。史記の時代には、遼東郡以東は衛氏朝鮮しか国は知られていなかったということであろう。

史記朝鮮列伝は次の文で始まる。

朝鮮王滿者 故燕人也 自始全燕時嘗略屬真番 朝鮮 為置吏 筑鄣塞  
秦滅燕 屬遼東外徼 漢興 為其遠難守 復修遼東故塞 至涓水為界 屬  
燕 燕王盧綰反 入匈奴 滿亡命 聚黨千餘人 魑結蠻夷服而東走出塞  
渡涓水 居秦故空地上下鄣 稍役屬真番 朝鮮蠻夷及故燕 齊亡命者王  
之 都王險

この文は殆ど理解できていない。ここで、真番が書かれているのが  
気にかかる。訳に替えて、Wiki「衛氏朝鮮」建国の項の初めの部分を  
引用する。

史記によれば、前漢の高祖の時代の紀元前 202 年、燕王臧荼は反乱  
を起こして処刑され、代わって盧綰を燕王に封じたが、紀元前 197 年  
に盧綰が漢に背いて匈奴に亡命すると、劉建を形式的な燕王に封じ  
たが実態は遼東郡を含む燕の旧領を直轄化した。その際、身の危険が  
迫った燕人の衛満は身なりを現地風にかえて涓水(現在の鴨緑江)を  
渡河、千人余りの徒党と共に朝鮮に亡命した。さっそく衛満は、我ら  
亡命者が朝鮮を護ると箕子朝鮮王の準王にとりいり、朝鮮西部に亡  
命者コロニーを造った。秦・漢の混乱期以来、この亡命者コロニーに  
逃げこんだ中国人は数万人にのぼっていた。さらに衛満は燕・齊・趙

からの亡命者を誘い入れ、亡命者コロニーの指導者となり、朝鮮を乗っ取る機会を虎視眈々とうかがい、ある時、衛満は芝居をうった。前漢が攻めてきたと詐称して、準王を護るという口実で、王都に乗りこんだのである。その時、準王は衛満に応戦したが、魏略は、「準は満と戦ったが、勝負にならなかった」と戦況を記した。芝居が現実となり、昨日の亡命者は、今日の朝鮮王となる。それは、亡命してから朝鮮王になるまで1年内外の出来事である。衛満は、中国人(燕・斉の亡命者)と原住民の連合政権を樹立、王險城(平壤)を首都として王位に就き、衛満朝鮮を建国した。

1年内外のうちに数万人の中国人が燕・斉・趙から亡命することが可能であったかなど疑問の残る所もある。

漢書西南夷兩粵朝鮮傳もほぼ同じ次の文で始まる。

朝鮮王満 燕人 自始燕時 嘗略屬真番 朝鮮 爲置吏築障 秦滅燕 屬  
遼東外徼 漢興 爲遠難守 復修遼東故塞 至涇水爲界 屬燕 燕王盧縮  
反 入匈奴 満亡命 聚党千餘人 椎結蠻夷服而東走出塞 渡涇水 居秦  
故空地上下障 稍役屬真番 朝鮮蠻夷及故燕 齊亡在者王之 都王險

秦が燕を滅ぼしたのは BC223 年であり、漢の成立したのは BC206 年である。両書にはこの後、武帝 BC141-BC87 の衛氏朝鮮討伐が書かれているが、ここでは、関連する漢書武帝紀の記事を引用しておく。

### 元朔元年 BC128 東夷葦君南閭等口二十八萬人降 為蒼海郡

東夷の葦君である南閭ら二十八万人が投降した。そこを蒼海郡とした。

三年 BC126 罷蒼海郡 蒼海郡を廢した。

### 元封二年 BC108 四月 朝鮮王攻殺遼東都尉 乃募天下死罪擊朝鮮

朝鮮王が遼東都尉を攻め、殺した。朝鮮を死罪とし、撃つことを命じた。

### 六月 遣樓船將軍楊僕、左將軍荀彘將應募罪人擊朝鮮

樓船將軍の楊僕と左將軍の荀彘を派遣し、朝鮮を討たした。

### 三年 BC107 夏 朝鮮斬其王右渠降 以其地為樂浪 臨屯 玄菟 真番郡

朝鮮はその王の右渠を斬り投降した。その地を樂浪・臨屯・玄菟・真番郡とした。

びんいん 韓: hán、汗: hàn、干: gān/gàn、真番; zhēn fān

## 4.1. 韓の記事

後漢書の韓条は次の文で始まる。

韓有三種 一曰馬韓 二曰辰韓 三曰弁辰 馬韓在西 有五十四國 其北  
與樂浪 南與倭接 辰韓在東 十有二國 其北與濊貊接 弁辰在辰韓之  
南 亦十有二國 其南亦與倭接 凡七十八國 伯濟是其一國焉 . . . 東  
西以海為限 皆古之辰國也

韓は3つに分かれる。1つは馬韓、2つめは辰韓、3つめは弁辰である。馬韓は韓の西部にあり、54国を有する。北は樂浪郡と、南は倭と接している。辰韓は東にあり、12国を有している。北は濊貊と接している。弁辰は辰韓の南に在り、12国を有し、南は倭と接している。全部で78国である。伯濟はこのうちの1国である。 . . . 東西は海で、全ては古の辰国である。

伯濟是其一國焉 は百濟を念頭においたものであろう。後漢書が成立した432年は百濟が初めて朝貢した東晋簡文帝咸安二年372より後であるが、後漢書の成立時でも百濟の出自ははっきりしていなくて、范曄は、伯濟が百濟となったと思ったのかもしれない。

ピンイン 伯: bó、百: bǎi



三国志の韓条は次の文で始まる。

韓在帶方之南 東西以海爲限 南與倭接 方可四千里 有三種 一曰馬韓 二曰辰韓 三曰弁韓 辰韓者 古之辰國也

韓は帶方郡の南で、その東西は海であり、南は倭と接し、4000 四方である。3種があり、1つ目は馬韓で2つ目は辰韓で、3つ目は弁韓である。辰韓は古の辰國である。

晋書の韓条は次の文で始まる。

韓種有三 一曰馬韓 二曰辰韓 三曰弁韓 辰韓在帶方南 東西以海爲限

韓は3に種があり、1つ目は馬韓で2つ目は辰韓で、3つ目は弁韓である。辰韓は帶方郡の南にある。東西は海である。

三韓の最後の国の名は、後漢書では弁辰であるが、三国志・晋書では弁韓である。三国志では、弁韓を用いているのはこの部分のみで、他では弁辰を使用している。

後漢書光武帝紀には

## 建武二十年 東夷韓國人率衆詣樂浪内附（東夷有辰韓 卞韓 馬韓 謂之三韓國也）

東夷の韓國人が大勢で樂浪郡に詣で内附した。（東夷には辰韓・卞韓・馬韓がある。これらは、いわゆる三韓の国である。）

とあり、弁のかわりに卞が用いられている。三韓は馬韓・辰韓・弁辰（卞辰）となり、二韓＋弁辰（卞辰）となる。古の辰国から、（馬韓・）辰韓を除いた所を卞辰（弁辰）としたと考えられる。

謎の国、辰国に関しては、後漢書は韓全体が古の辰国としているが、三国志では辰韓が古の辰国としている。倭と辰国の関係は書かれていない。

三国志では構成する諸国の名前を全て挙げていますが、他は個数のみである。後漢書で伯濟国に言及している。後漢書の編纂された432年では、百濟が知られていたが、はっきりと伯濟の後とは書かれていないのは、百濟の出自はわかっていなかったと考えられる。

びんいん 弁: biàn、卞: biàn、辰: chén、秦: qín

続いて、馬韓・辰韓・弁辰の風俗が書かれている。後漢書では弁辰は **弁辰與辰韓雜居** で始まる短いものである。辰王と辰国も書かれ

ているが、これは後で扱う。

この次に記年記事が 3 つ書かれている。弁辰の後に韓全体と思える記事が書かれているのは、奇異に感じたが、ここまでは、韓の地勢・国勢・風俗を各種別に書いてきて、ここから記年記事が始まる。

**初 朝鮮王準為衛滿所破 迺將其餘衆數韃人走入海 攻馬韓 破之 自立為韓王 準後滅絶 馬韓人復自立為辰王（後漢）**

はじめ、朝鮮王の箕準が衛滿に破れたとき、将と民衆数千人とともに海に逃れ、馬韓を攻め破り、自ら韓王となった。準の子孫はその後途絶えたため、馬韓の人は復辰王を立てた。

この記事が韓の現れる最も古い記事である。攻馬韓が馬韓という国か地方かより、今馬韓と呼ばれている地域を指すと考える。韓王が途絶えた後を馬韓といったのか。五王の上奏文では慕韓である。漢が成立したのは BC221 年で、武帝が衛氏朝鮮を滅ぼしたのは BC108 年である。

後漢書では(三国志でも)この記事以外に、韓王は書かれていない。

さらに、馬韓王・辰韓王・弁韓王も現れない。韓という地方が3つの部分に分けられ、そこに幾つかの国があるという状況である。これに替わって、辰王、あるいは、辰国は時々現れるが、詳細は殆どわからない。かつて韓という国があったが、今は三つに分かれているということか。

後漢書の最初の記年記事は

**建武二十年 44 韓人廉斯人嚠/甦/蘇馬謨等 詣樂浪貢獻 光武封嚠/甦/蘇馬謨為漢廉斯邑君 使屬樂浪郡 四時朝謁**

韓人で廉斯の人である嚠/甦/蘇馬謨らが樂浪に詣で貢獻した。光武帝は嚠/甦/蘇馬謨を漢の廉斯邑の君に封じ、樂浪郡に属させた。四季ごとに朝謁している。

である。嚠/甦/蘇 は繁体字にへの変換で1つに絞りきれず、候補を挙げたものである。最後の蘇をとれば、韓人で廉斯人の蘇馬謨となる。

漢廉斯邑君であるが、三国志で挙げられている三韓の諸国に廉斯国はない。外郡の長には王位が与えられるが、内郡の王は太守である。その下の県の朝貢者に与えるのは侯なので、君はその下である。Wiki

では郡の下に県あり、県の下は郷・里である。邑は郷と同じかもしれない。また、四時は各季節という意味か。これならば、楽浪郡衙にかなり近い邑ということになる。

最後の記年記事は次である。

**靈帝 168-189 末 韓濊並盛 郡縣不能製 百姓苦亂 多流亡入韓者**（後漢）

靈帝の終わりの頃、韓と濊は共に盛んになった。楽浪郡とその県は統制ができず、百姓は苦しみ、多数が韓に逃れた。

倭国の大乱は桓靈間であったから、韓濊並盛はその後である。大乱で倭の勢力が衰えたので韓濊が盛んになったと考えられる。

三国志では、桓靈之末で始まるこれと殆ど同じ記事と以下の記事が馬韓の国勢と風俗の間におかれている。

**建安 196-220 中 公孫康分屯有縣以南荒地爲帶方郡 遣公孫模 張敞等 收集遺民 興兵伐韓濊 舊民稍出 是後倭韓遂屬帶方**

公孫康は屯有縣を分け南の荒地と併せて帶方郡とした。公孫模や張敞らを派

遣し、難民を集め、兵とともに韓濊を伐った。舊民がやや出た。その後倭韓は帯方郡に属した。

景初中 237-239 明帝密遣帯方太守劉昕、樂浪太守鮮于嗣越海定二郡諸韓國臣智加賜邑君印綬 其次與邑長 其俗好衣幘 下戸詣郡朝謁 皆假 衣幘 自服印綬衣幘千有餘人 部從事吳林以樂浪本統韓國 分割辰韓八國以與樂浪 吏譯轉有異同 臣智激韓忿 攻帯方郡崎離營 時太守弓遵 樂浪太守劉茂興 兵伐之 遵戰死 二郡遂滅韓（三）

明帝は帯方太守の劉昕と樂浪太守の鮮于嗣を密かに二郡に派遣し、韓の諸国の臣智に邑君の印綬を加賜した。・・・部従事の吳林は、本は樂浪郡が韓国を統治していたことから、辰韓の八国を樂浪郡に編入した。通訳が異なる内容を伝えたため、臣智は激し、韓は忿し、帯方郡を攻めた。その時の太守弓遵は樂浪の太守劉茂とこれを伐った。遵は戦死したが、二郡は韓を滅ぼした。

これらが韓の記年記事の全てである。

密遣 を ``密かに派遣’ ’ としたが、これでは郡の太守の派遣としてはおかしい。文意からは、密命を与えて派遣したほうがよいが可能かどうかわからない。

帯方郡は屯有縣と南の荒地からなるから、韓の地を含んでいない。

あるいは、樂浪郡の南部で、海岸沿いで、現在の北朝鮮の西南部にあったと考えられる。また、文意より郡衙は屯有縣にあったと思われる。海運の発達により、大きな船が寄港できる港が必要になったことが背景にあると考える。

後の記事から、樂浪郡に辰韓の 8 国を組み込むことから、辰韓は樂浪郡に接していて、この地の統治が可能であったはずである。帶方郡とは接していたかもしれないが、交通は樂浪郡よりも不便であったと思われる。現在の地名では、帶方郡の郡衙があったことが可能性のある黄海北道黄州より樂浪郡の郡衙があった平壤のほうが行き易い所になる。あるいは、朝鮮半島の東部は樂浪郡の管轄であったのかもしれない。

前の記事から、辰韓ははじめ 6 国で後に 12 国となった。稍分爲十二 とあるから分割して 12 国になったかもしれないが、南の地を併せたことも考えられる。12 国なった原因は色々考えられるが現状では判断のしようがない。しかし、8 国の割譲は当然 12 国になった後とであり、8 国は樂浪郡に近い国と考える。さらに、始めの 6 国の多く化全てが 8 国に含まれているのではないかと思う。辰韓は馬韓の東で樂浪郡に近い国を含み馬韓の 1/4 程度とすれば、ほぼ現在の江

原道の何処かと考える。南朝鮮の北部で江原道辺りではないか。太白山脈の西ならば、春川、原州、忠州、東ならば、東草、東海辺りが候補となる。

辰韓が慶州を都とする新羅になったのが通説と思われるが、上の解釈とはかなり異なる。通説は後の統一新羅のイメージが影響しているのではないか。倭国大乱の後 韓滅強盛 を考えれば、辰韓が南の地を併合して慶州を都としたとする折衷案も考えられる。

晋書では記年記事は馬韓と辰韓+弁辰に書かれている。

韓条の最後に

**馬韓之西 海島上有州鬻國 其人短小 髡頭**（後漢）

馬韓の西の海の島に州鬻国がある。背は短く、髪を剃っている。・・・

と書かれている。

西海岸の大きな島は江華島であるが近い気がする。



## 4.2. 馬韓

後漢書の馬韓の国勢記事は

**馬韓最大 共立其種為辰王 都目支國 儘/盡王三韓之地 其諸國王先  
皆是馬韓種人焉（後漢）**

馬韓は最大で、馬韓人から辰王を共立する。都は都目支国にある。（三韓の地の王である。其諸國以後の意は、韓の諸国の王は昔は馬韓の人であった。）

で始まる。

馬韓の王については記述がない。また、辰王の記述はあるが、辰国に関しては、韓条の初めに、皆古之辰國也 と書かれているので、後漢書の時代には存在していないことになる。この辰と辰王は時々現れる。

これより、目支國(月支國)を都とした辰王は古の辰国の王の末裔と考える。辰国はなく辰王がいるということは、辰国は滅びたが、王家は維持され、王は馬韓の諸国の承認を得て王となっていたのではないかと考える。

この他に 大率皆魁頭露<sub>レ</sub>介（後漢）があるが、理解できていない。

三国志では馬韓の 54 カ国の国名が全て挙げられている。この 54 カ国は

爰襄國 牟水國 桑外國 小石索國 大石索國 優休牟涿國 臣漬沽國  
伯濟國 速盧不斯國 日華國 古誕者國 古離國 怒藍國 月支國 咨離  
牟盧國 素謂乾國 古爰國 莫盧國 卑離國 占離卑國 臣曩國 支侵國  
狗盧國 卑彌國 監奚卑離國 古蒲國 致利鞠國 冉路國 兒林國 駟盧  
國 内卑離國 感奚國 萬盧國 辟卑離國 白斯烏旦國 一離國 不彌國  
支半國 狗素國 捷盧國 牟盧卑離國 臣蘇塗國 莫盧國 古臘國 臨素  
半國 臣雲新國 如來卑離國 楚山塗卑離國 一難國 狗奚國 不雲國  
不斯漬邪國 爰池國 乾馬國 楚離國 凡五十餘國

である。国の比定が出来なければ、凡五十余国で済ましても殆ど変わらないと思われるのに、何故全てを挙げたのか、また、挙げられたのか。帯方郡と接していたため郡の直接の監視下におかれていたことも考えられる。

上の文に続き、

凡五十餘國 大國萬餘家 小國數千家 總十餘萬戸 辰王治月支國 臣智或加優呼臣雲遣支報安邪蹶支漬臣離兒不例拘邪秦支廉之號 其官

## 有魏率善 邑君 歸義侯 中郎將 都尉 伯長

凡そ50国余りで、大国は1万家余り、小国は数千家併せて10万あまりである。辰王は月支國を治めている。・・・ 魏の率善・邑君・歸義侯・中郎將・都尉・伯長のような官吏がいる。

## 侯准既僭號稱王 爲燕亡人衛滿所攻奪 將其左右宮人走入海 居韓地 自號韓王 其後絶滅 今韓人猶有奉其祭祀者 漢時屬樂浪郡 四時朝謁

(朝鮮)侯准は王を僭称していた。燕の亡命者衛滿に攻め奪われ、将と宮廷の人と海に逃れ韓に居住し、韓王と自称した。その後絶滅した。今韓の人で祭祀者として奉る者がいる。漢の時には樂浪郡に属し、季節ごとに朝謁した。

が書かれている。さらに、魏略曰でその経緯が書かれているが、これは理解できていない。

Wiki「盧綰」から、盧綰が匈奴へ亡命したのはBC195年である。箕准が衛滿に追われ韓の地に逃れたのはこの年よりそんなに離れていない時期であろう。

其後絶滅 とあるから、箕氏の韓は滅びたことになる。後漢書に書かれている王は辰王だけであるので、滅びた時期は後漢成立までとなる。

ここで、桓靈之末 韓濊強盛 の記事が書かれた後

**國邑各立一人主祭天神 名之天君 又諸國各有別邑 名之爲蘇塗**

**立大木 縣鈴鼓 事鬼神 諸亡逃至其中 皆不還之 好作賊**

各邑は一人の主祭天神を立てる。これを天君といっている。・・・

が書かれている。

中国の郡県制では、郡→県→邑 である。馬韓が郡レベルとすればこれを構成する国は県レベルである。その下だから邑としたのかもかもしれない。

・・・は理解できていないが、駆け込み寺を連想させる内容が書かれている。

晋書四夷傳では、次のように、朝貢が記録されている。

**武帝太康元年 280 二年 281 其主頻遣使入貢方物**

その主は立て続けに朝貢した。

**七年 286 八年 287 、十年 289 又頻至** また頻繁に朝貢した。

**太熙元年 290 詣東夷校尉何龕上獻** 東夷校尉の何龕に詣で、上獻した。

**咸寧三年 277 復來 明年又請内附** また来た。翌年は内附を要請した。

咸寧は太康の前の元号である。元号をとれば、太康元年の前となり、咸寧三年 277 から太熙元と年 290 までの 14 年間に 8 回朝貢したことになる。凡そ 3 年に 2 回の頻度となる。太熙三年としても 12 年間になり、大差はない。3.1 節表 I02 に咸寧年間の朝貢を除き、東夷〇〇国と辰韓の朝貢と併せたものが示されている。

太康元年の記事について考える。

其主は東夷伝の文からは其王と書かれているところである。後漢や三国魏では(馬)韓王は封じていなかったのので、正史では王とは書けなかったことが考えられる。あるいは、王ではなく、盟主的存在であったかもしれない。

次の頻は主(王)の名前も考えられるが、「立て続け(頻繁)」とした。

東夷伝の記事からは、馬韓の主が単独で朝貢したと理解するしかないが、帝紀には馬韓の主の朝貢の記事は無く、東夷〇〇国の朝貢の記事が書かれている。これに関して、3.1 節で大雑把な考察をしたが、もう少し考えてみよう。まず、表 I02 で、咸寧三年 277 と四年 278 に馬韓の朝貢を加える。

まず目につくことは、馬韓・辰韓の朝貢したときは必ず東夷〇〇国も朝貢している。この表のように頻繁に朝貢するには、高句麗以遠の

東夷諸国は不可能であろうと思われ、帯方郡以南の東夷であろう。また、頻度から考えて、帯方郡に出向いたと考える。

3.1 節では、東夷〇〇国は倭の移住後の残存部族であろうと考えた。これから、朝貢の目標が推測できる。かって、卑弥呼の朝貢のとき、難升米が率善中郎將に、牛利が率善校尉に封じられ、銀印青綬が与えられた。このように爵位を得ることが考えられる。さらに紛争の調停もあったかもしれない。

東夷〇〇国と馬韓・辰韓の3者が朝貢した年は、太康元年 280、二年 281、七年 286 の3つである。これらに意味があるのだろうか。

正史には書かれていないが、源資料には朝貢の記録があったはずで、全ての国の名前が書いてあったと思われる。このリストに三国志の三韓の諸国にはないものが多く、東夷〇〇国は韓の国ではないとされたと考える。

東夷〇〇国の継続的な朝貢は永平元年 291 で終わり、この後は、大元七年 382 に1回記録されているのみである。

楽浪郡と帯方郡が高句麗に滅ぼされたのが 313 年で、簡文帝紀に記された百済の朝貢は 372 年であることから、これら東夷諸国は百済に支配されたか、百済を盟主としたかが考えられる。

### 4.3. 辰韓

後漢書の書き出しは

辰韓 耆老自言秦之亡人 避苦役 適韓國 馬韓割東界地與之 其名國  
為邦

古老のいう事には、辰韓は秦の亡人で、苦役を避け韓國に移った。馬韓がその東界の地を割いて与えた。その国名の国を造った。

である。

三国志魏書は

辰韓在馬韓之東 其耆老傳世 自言古之亡人避秦役來適韓國 馬韓割  
其東界地與之 有城柵 其言語不與馬韓同 名國為邦 弓為弧 賊為寇  
行酒為 行觴 相呼皆為徒 有似秦人 非但燕 齊之名物也 名樂浪人為  
阿殘： 東方人名我為阿 謂樂浪人本其殘餘人 今有名之為秦韓者 始  
有六國 稍分為十二國

辰韓は馬韓の東にある。秦の役を逃れて韓国に移り、馬韓に与えられたその東の地に住んだ亡人であると伝えられていると古老が伝えている。城柵があり、言葉は馬韓と同じでない。・・・始めは6国であったが、その後別れて12国と

なった。

で始まる。

6国から12国となったのは、侵略か開拓かはわからないが、国が拡大したのではないか。拡大の方向としては東と南が考えられる。文からは、始めは東が海とは書かれていないので、東に海まで広がり、続いて南に拡大していったと考えている。

晋書の書き出しは

辰韓在馬韓之東 自言秦之亡人避役入韓 馬韓割其東界地與之 立城柵 言語有類秦人 由是或謂之爲秦韓 初有六國 後稍分爲十二 又有弁辰 亦十二國 合四五萬戸 各有渠帥 皆屬於辰韓 辰韓常用馬韓人作主 雖世世相承 而不得自立 明其流移之人 故爲馬韓所制也

辰韓は馬韓の東にある。秦の亡命者で韓に避難したものに馬韓がその東の境界の地を与えたと自ら言う。初めは6国で後に12国になった。弁辰があり、これも12国である。合わせて合四五萬戸で、各国は渠帥をもつ。皆辰韓に属する。辰韓の主は常に馬韓人が選ぶ。世世受け継がれているが、自立は出来ない。流移に人で、馬韓が居所を与えた。



である。

秦の亡人は本当だろうか。秦の亡人というと秦朝の関係者をまず思う。また、徐福伝説から、図 II05 の山東省辺りの部族が秦に追われて亡命した可能性は残る。どちらにしても、秦の滅亡以前である。

前節で、衛氏朝鮮が出来たのは漢の初期、盧縮が匈奴へ亡命した BC195 年の頃としたので、秦の滅亡後であり、時期が前後する。可能なものとしては、秦の亡人が箕准に追われ、東に逃れたことが考えられる。

びんいん 秦; qín、辰; chén

Wiki「徐福」には

司馬遷の史記の巻百十八淮南衡山列伝によると、秦の始皇帝に、東方の三神山に長生不老(不老不死)の靈薬があると具申し、始皇帝の命を受け、3,000 人の童男童女と百工を従え、五穀の種を持って、東方に船出し、平原広沢を得て、王となり戻らなかったとの記述がある。

と書かれている。この徐福伝説から、紀元前後の航海技術は、山東半島辺りから朝鮮半島にはリスクはあるものの可能だったといえる。

三国志には

部從事吳林以樂浪本統韓國 分割辰韓八國以與樂浪 吏譯轉有異同  
臣智激韓忿 攻帶方郡崎離營 時太守弓遵 樂浪太守劉茂興 兵伐之  
遵戰死 二郡遂滅韓

部従事の吳林は、本は樂浪郡が韓国を統治していたことから、辰韓の八国を樂浪郡に編入した。通訳が異なる内容を伝えたため、臣智は激し、韓は憤り、帶方郡を攻めた。その時の太守弓遵は樂浪の太守劉茂とこれを伐った。遵は戦死したが、二郡は韓を滅ぼした。

という記事がある。

分割辰韓八國以與樂浪 からは、樂浪郡に8国を組み込むことより、辰韓は樂浪郡と接していて、この地の統治が可能であったはずである。帶方郡とは接していたかもしれないが、交通は樂浪郡よりも不便ではなかったと思われる。現在の地名では、帶方郡の郡衙があったことが可能性のある黄海北道黄州より樂浪郡の郡衙があった平壤のほうが行き易い所になる。あるいは、朝鮮半島の東部は樂浪郡の管轄であったのかもしれない。

初有六國 後稍分爲十二 については、分割して12国になったかもしれないが、南の地を併せたとするのが自然であろう。8国の割譲は

当然 12 国になった後であり、8 国は楽浪郡に近い、あるいは、残った 4 国は楽浪郡より遠い国と考える。さらに、始めの 6 国の全てが 8 国に含まれているのではないかと思う。辰韓は馬韓の東で楽浪郡に近い国を含み馬韓の 1/4 程度とすれば、ほぼ現在の江原道の何処かと考える。南朝鮮の北部で江原道辺りではないか。太白山脈の西ならば、春川、原州、忠州、東ならば、東草、東海辺りが候補となる。辰韓が慶州を都とする新羅になったのが通説と思われるが、上の解釈とはかなり異なる。通説は後の統一新羅のイメージが影響しているのではないか。倭国大乱の後 韓濊強盛 を考えれば、辰韓が南の地を併合して慶州を都としたとすることも考えられる。

風俗の記事を少し拾ってみる。

**有似秦語 故或名之為秦韓**（後漢）      秦の言葉に似ている。

**其言語不與馬韓同 名國爲邦 弓爲弧 賊爲寇 行酒爲 行觴 相呼皆爲徒 有似秦人 非但燕 齊之名物也 名樂浪人爲阿殘**（三）

ことばは馬韓と同じではない。・・・ 秦人に似ている者がいる、但し燕ではない。齊と同じものがある。楽浪の人を阿殘という。

秦人のうち、燕ではなく齊であるのは徐福伝説を思い起こさせ、徐

福の様な方士の子孫説への援護にはなる。

有城柵屋室 諸小別/警邑 各有渠帥 大者名臣智 次有儉側 次有樊祗  
次有殺奚 次有邑藉（後漢）

夫々には渠帥がいる。大きいものは臣智、次は儉側、以下樊祗、殺奚、邑藉

國齟鐵 濊 倭 馬韓並從市之 凡諸貿易 皆以鐵為貨(後漢)

辰韓では鉄を産している。濊 倭 馬韓は市において、交易し、鉄を貨幣の様に使う。

鉄貨・鉄銭とは書かれていないので、インゴットを用いていたと考える。鉄が混乱なく通貨の様に用いられるのは、鉄の生産量がそれほど多くはなかったということを意味しているとは考えられないか。

なんとなく製法はタタラ製鉄と思う。朝鮮半島南部に古代の製鉄遺跡があれば、そこが辰韓の候補となるが、今の韓国の状況からこれらの発掘は当面は無理だと思われる。考古学的な発掘が出来ることが難しいであろうことと、ここ 30 年程の経済発展で無くなってしまったのではという危惧である。

武帝太康元年 280 其王遣使獻方物（晋）

その王が使いを送り朝献した。

二年 281 復來朝貢 七年 286 又來 朝貢した。七年にもまた来た。

これらの朝貢の年には馬韓も朝貢している。また、辰韓と弁辰に対する記事として書かれている。其王 は辰韓の王と考えるのが妥当と思えるが、辰韓の王とは書かれていない。辰王のことか。馬韓では其主としていた。

## 4.4. 弁辰

三国志(後漢書)では、韓条の始めは弁韓と書いているが、他では弁辰となっている。後漢書は共に弁辰である。晋書には弁辰は書かれていない。4.1節で卞辰の用例も見た。

後漢書は次の文で始まる。

**弁辰與辰韓雜居 城郭衣服皆同 語言風俗有異 其人形皆長大 美髮衣服潔清 而刑法嚴峻 其國近倭 故頗有文身者 (後漢)**

弁辰と辰韓は雑居している。城郭と衣服は同じで、言語と風俗は異なる所がある。・・・

弁辰與辰韓雜居 は、弁辰諸国・辰韓諸国が入り交じっているという意味であろうか。

三国志では、韓条の始めの三韓を挙げている所は弁韓と言っているが、辰韓条はなく、弁辰条となっている。国名を違えて書くということは正史としては異常なことではないかと思える。とにかく、記事の中では弁辰を用いているので、なるだけ、弁辰を用いることにする。

弁辰亦十二國 又有諸小別邑 各有渠帥 大者名臣智 其次有險側 次有樊濊 次有殺奚 次有邑借 有已柢國 不斯國 弁辰彌離彌凍國 弁辰接塗國 勤耆國 難彌離彌凍國 弁辰古資彌凍國 弁辰古淳是國 冉奚國 弁辰半路國 弁辰樂奴國 軍彌國（弁軍彌國） 弁辰彌烏邪馬國 如湛國 弁辰甘路國 戸路國 州鮮國（馬延國） 弁辰狗邪國 弁辰走漕馬國 弁辰安邪國 弁辰瀆盧國 斯盧國 優由國 弁辰韓合二十四國

弁辰はまた 12 国である。それぞれは諸小別邑があり、渠帥がある。大は臣智といい、その次は險側、次は樊濊、次は殺奚、次は邑借である。（国名が列挙）弁韓と辰韓併せて 24 カ国である。

風俗が書かれた後に、次が書かれ、韓条は終わっている。ここに、国出鉄 で始まる記事も書かれている。

弁辰與辰韓雜居 亦有城郭 衣服居處與辰韓同 言語法俗相似 祠祭鬼神有異 施灶皆在戸西 其瀆盧國與倭接界 十二國亦有王 其人形皆大衣服絜清 長髮 亦作廣幅細布 法俗特巖峻

弁辰と辰韓は入り混じっている。また城郭がある。衣服は辰韓と同じで、言葉と法俗は似ている。鬼神を祭ることでは差がある。家の入り口は西にある。

瀆盧國は倭と接している。12国には王がいる。人は皆大きく衣服は絜清で、長髪であり、幅の広い細布を造る。法俗は嚴峻である。

最後の文の 弁辰與辰韓雜居 は後漢書の弁辰項の書き出しと同じである。

24カ国のリストについて考える。

( )付きの国を除けば、弁辰の付かない国は11で、弁辰の付く国は12である。また、弁辰をとっても同じになる国はない。これより、弁辰の付かない国が辰韓の国で、弁辰の付く国が弁辰の国と思われる。辰韓の国は辰韓の条に、弁辰の国は弁辰の条に分けて書くことが可能なのに、併せて24国のリストを挙げ、弁辰を付け辰韓と区別するために書かれていると考えられる。弁辰與辰韓雜居 と関係し、何らかの意味を持つのか、単なる混乱なのか。後者は正史ということからあり得ないと思う。そうならば、何故一括して書くのかと疑問が尽きない。

とりあえず、弁辰の付く国と付かない国に分けてみる。

付か 已柢國、不斯國、勤耆國、難彌離彌凍國、軍彌國、如湛國、  
ない 戸路國、州鮮國(馬延國)、冉奚國、斯盧國、優由國



付く 弁辰彌離彌凍國、弁辰接塗國、弁辰古資彌凍國、  
弁辰古淳是國、弁辰彌烏邪馬國、弁辰半路國、弁辰樂奴國、  
(弁軍彌國)、弁辰甘路國、弁辰狗邪國、弁辰走漕馬國、  
弁辰安邪國、弁辰瀆盧國

となる。

興味ある国としては、弁辰彌烏邪馬国、弁辰狗邪国、斯盧国(新羅)が挙げられる。たとえば、弁辰狗邪国で、弁辰を韓に置き換えれば、韓狗邪国となる。韓と狗邪を入れ換えれば、狗邪韓国になる。弁辰彌烏邪馬国は邪馬が含まれていることである。

新羅本紀にある新羅の名前として、斯羅 斯盧 新羅 が挙げられている。

晋書では

**有弁辰 亦十二國 合四五萬戸 各有渠帥 皆屬於辰韓 辰韓常用馬韓人作主**

弁辰はまた 12 国で合わせて 4・5 万戸である。各国には渠帥がいる。全ては辰韓に属する。辰韓の主は馬韓人が作っている。

と書かれている。弁辰が辰韓に属することは他の 2 書には書かれていないことである。雑居の状態から辰韓に属するようになったということかもしれない。

## 4.5. 辰王・辰国

次の図は、Wiki「辰国」で「朝鮮半島の地図」とされているものである。この図の由来がわかれば面白い。記されていることを前提とすれば、鮮卑と烏桓が書かれているから上限は BC200 年頃で下限は衛氏朝鮮の成立である。Wiki「衛氏朝鮮」ではその成立は 195 年? と書かれている。左下に Han Dynasty と書かれている。漢の成立は BC206 年である。おおよそ BC200 年頃としておく。



図 II01 箕子朝鮮と辰国

Wiki「辰国」では、

辰国は、衛氏朝鮮の時代(BC2C)に朝鮮半島の南部にあったという国である。記録は少なく、その詳細はほとんどわからない。三国志によると三韓の辰韓の前身にあたる国であると見えるが、実在しなかったという説もある。

正史の記事を、過去の引用と重複するが、挙げていく。

**韓有三種・・・皆古之辰国也・・・馬韓最大 共立其種為辰王 都目支國（後漢）**

3種類の韓があり、・・・それらは皆昔の辰国である。・・・馬韓が最大で、韓の中より辰王を共立する。都は目支國である。

**辰韓者古之辰国也・・・辰王治月支國（三）**

辰韓は昔の辰国である。辰王は月支國を治めている。

**其十二國屬辰王 辰王常用馬韓人作之 世世相繼 辰王不得自立為王（三）**

辰韓の十二国は辰王に属する。辰王は馬韓人の中から選び継がれている。辰王は自ら王となることは出来ない。

古之辰国には、2通りの解釈が可能である。1つは辰国の末裔で、もう1つは辰国のあったところである。どちらでも議論に影響はほとんどない。

古とは何時のことか。後漢書・三国志の箕準の記事から、箕準が韓の地に移る前で、が攻めたのは辰国とも考えられる。辰国は滅ぼされずに辰王が目支國に居住したが、辰王となるには馬韓(箕準の子孫)の承認が必要であったとすれば上の後漢書の記事とも整合がつく。

## 4.6. 韓と三韓の王

東夷が書かれている列伝では、国王が書かれている国と 無大君王あるいは 無大君長 など国王がいないと書かれている国がある。ここでの王は、正史の言葉を用いれば、夷蛮の主である。この種の王は少なく、殆どの王は三国魏により親魏倭王の爵位を受けた倭(女)王卑弥呼や、後漢の光武帝により王号を復号された高句麗王のように、中国の王朝により叙位された王である。これは、中国王朝の正史ということから当然のことである。

ここでは、朝鮮王と韓王、および、各韓王について、引用してきた記事を見直してみる。

まず、韓王についてみていく。後漢書からは「朝鮮王の箕準が衛滿に破れたとき、海に逃れ、馬韓を攻め、自ら韓王となった。」三国志では「侯准は王を僭称していた。」と書かれていた。

三国志の記事からは、漢王朝は箕準を朝鮮侯は認めていたが、朝鮮王は認めていなかったことになる。僭称としていることは、箕準が朝鮮を支配していたことは認めたことになるのではないか。BC200年頃に朝鮮がどの程度中国に認識されていたかが問題となる。

現状では、これ以外には韓王の記述を見つけていない。

後漢書東夷伝の前文で「燕人の衛満は朝鮮に避難し、その国の王となった。100年あまりの後、武帝がこれを滅ぼした。」と書かれていた。この後、漢の武帝により、衛氏朝鮮の地には楽浪郡が、その南には真番郡がおかれたので、正史には朝鮮王・韓王は登場しないことになる。この地に王が現れるのは、楽浪郡と帯方郡が滅びた後の宋の時代の百済王である。

馬韓についても馬韓王は書かれていない。かわりに、「馬韓人から辰王を共立した」と書かれている。辰国と辰王については前節で考察した。このとき、辰国と辰韓の扱いが曖昧のように感じた。

後漢以降は300年頃までは、朝鮮半島で中国王朝が認めた王は、倭王のみであり、倭の移住後はなくなったことになる。

三国志では韓の78国の国名を挙げています。この数からして、県の下の邑レベルの名前まで帯方郡は把握していたことになる。また、「各邑には、魏の率善 邑君 歸義侯 中郎將 都尉 伯長のような役人がいる」と書かれているのは、楽浪郡・帯方郡の制度を模したもので

はないかと考える。

これらから、帯方郡には入っていないが、同じレベルで直接のコントロールを受けていたのではないかと考える。この状況は楽浪郡・帯方郡にとっては、大きな勢力が出来るのを抑制しており、都合の良いものであったはずである。



## 5. 東アジア概観（中国と東夷諸国）

中国の歴史を東夷に関することを中心に整理してみる。実際には、Wikipedia の記事の選択引用となる。

### 5.1. 中国概観

まず、中国の大まかな地勢のうち山脈を見ておこう。

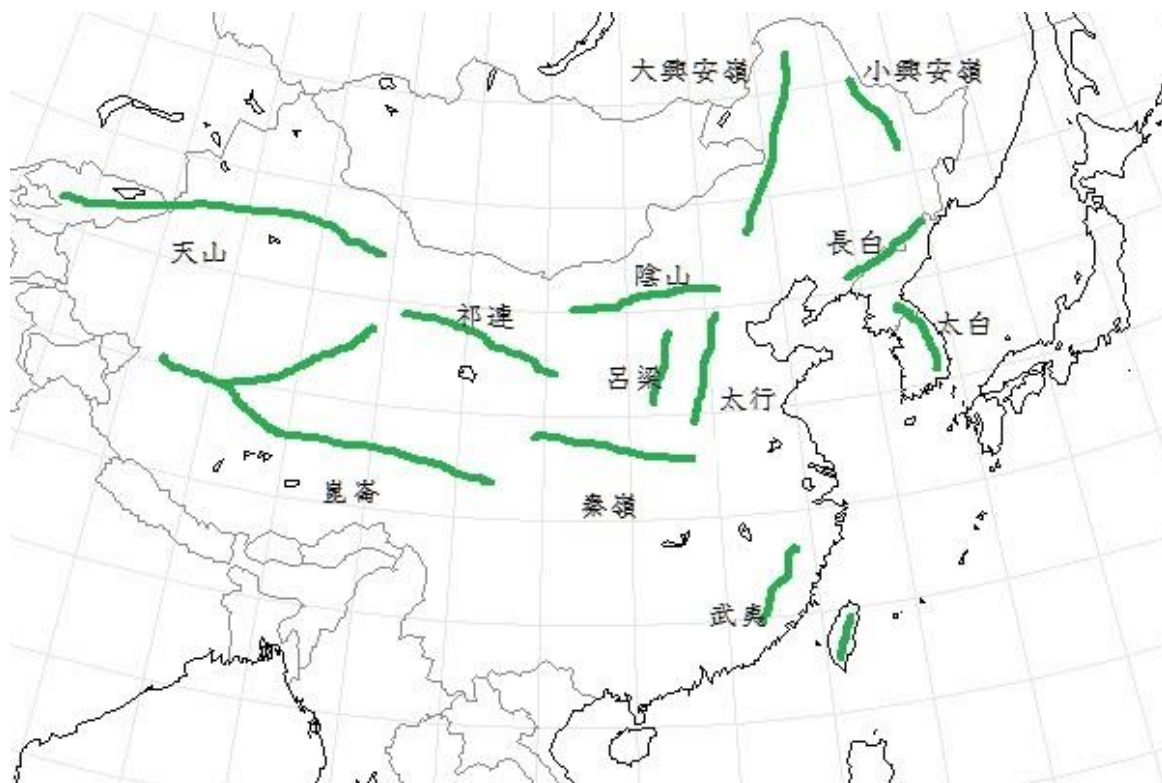


図 II02 東アジアの山脈

まず、Wiki「黄河」を見ていく。

黄河下流域は、古来よりたびたび氾濫し、大きく流路を変えてきた。古代には現代の河道に比べてかなり西寄りを流れており、渤海北部の天津付近に河口があったが、紀元前 602 年に記録されている最初の河道変遷が起こり、黄河は旧河道と現代の河道のほぼ中間を流れるようになった。春秋戦国時代は沿岸諸国が堤防を建設したが、この堤防は黄河本流から十分な距離をもって建設されており、氾濫しても堤防内にてある程度吸収することが可能であったため、黄河はやや治まっていた。前漢の時代に入ると、紀元前 132 年に濮陽において黄河が決壊した。この決壊はそれまで知られていた黄河以北の河北平野における氾濫ではなく、黄河の南側で決壊して淮河へと流れ込むものであり、当時の経済中心のひとつであった黄河・淮河間の平野（淮北平野）に甚大な被害をもたらした。この決壊は 23 年後の紀元前 109 年にふさがれたものの、以後黄河は氾濫を繰り返すようになった。

新王朝時代の 11 年にはついに決壊して河道がさらに東へと転じ、現在の河道よりやや北をほぼ現河道と並行するように流れるようになった。この氾濫・決壊は黄河下流域に甚大な被害を与え続けたが、69 年から 70 年にかけて後漢の王景による治水工事が行われ、黄河は安定を取り戻した。

中国文明に大きな影響をもっている黄河を下流から見ていく。まず、山東半島の北側辺りが河口である。河口は何回か変わり、山東半島の南になったこともある。ここから南西に遡り、秦嶺山脈の東辺りから西に流れる。この辺りに洛陽・開封がある。この先が中流域となる。この次は、呂梁山脈の西側を北に遡る。この曲がり角辺りが三門峡である。ここで、西安から東流してきた渭水と合流する。陰山山脈にぶつかって西に向かい、その終わり辺りから南西に遡っていく。

もう 1 つの大河の揚子江は上海辺りからほぼ西に向かって遡っていく。

中国の王朝のイメージは皇帝がいて、領土を直接統治できる官僚組織があり、周辺の国々に服従を求め、従わないものには軍を派遣し討つといったところであろうか。各統一王朝の最盛期は。このイメージ通りであったと思われるが、それ以外は外夷を討つだけの力はなかった。逆に、北方の外夷の侵攻に悩まされるようになっていった。

秦王朝はこのような王朝で最初のものである。この体制は、南北朝と五代十国の分裂時代を除き、清まで続いていた。

唐までの中国の王朝と対応する正史(作(編)者と製作年)を次の表 II01 に示す。

表 II01 中国の王朝と正史

| 王朝名                      | 書名                  |
|--------------------------|---------------------|
| 黄河(長江・遼河) 文明             |                     |
| 夏・殷                      |                     |
| 西周 BC1046-BC771          |                     |
| 東周 BC771-BC221           |                     |
| 春秋 BC403 戦国              |                     |
| 秦 BC221-BC201            | 1 史記 司馬遷 BC91       |
| 前漢 BC206-8               | 2 漢書 班固 90?         |
| 新 8-23                   |                     |
| 後漢 25-220                | 3 後漢書 范曄432         |
| 魏 220-265                |                     |
| 三国 220-265 呉222-280      | 4 三国志 陳寿 280+       |
| 蜀221-263                 |                     |
| 西晋 265-317               | 5 晋書 房玄齡等 648       |
| 十六国 304-439   東晋 317-420 | 上                   |
| 北魏 386-534               | 10 魏書 魏収 554        |
| 宋 420-479                | 6 宋書 沈約 513-        |
| 齊 479-502                | 7 南齊書 蕭子顯 537-      |
| 東魏 534-550               |                     |
| 西魏 535-556               | 8 梁書 姚思廉 629        |
| 梁 502-557                |                     |
| 北齊 550-577               | 11 北齊書 李百薬 636      |
| 北周 556-581               | 12 周書 令狐德棻等 636     |
| 陳 557-589                | 9 陳書 姚思廉 636        |
|                          | 14 南史 李延寿 659       |
| 隋 581-618                | 13 隋書 魏徵等 636       |
| 唐 618-690, 705-907       | 16 旧唐書 劉昫等 945      |
|                          | 17 新唐書: 欧陽脩・宋祁 1060 |

王朝の滅亡年と編者の没年の差が 30 年以内のものは、三国志は魏

の滅亡から 15 年、魏書 20 年、陳書 18 年で、宋書 34 年はこれに次ぐものである。

%%%

中国の最初の王朝は殷で次は周であると習ってきた。史記では、三皇五帝から夏・殷・周と続いたと書かれているが、遺跡が発見されたのは殷から後であるということである。これも、最近では夏の遺跡かもしれない遺跡が発見されたという記事もあった。また、揚子江には異なる古代文化があったということも聞く。

殷と周の時代は上で述べた中国とは言えないのではないか。周は部族連合のような気がする。全国を統治する官僚組織は無かったのではないかと考えている。秦による郡県制の成立をもって上記中国が成立したと考える。

Wiki「東夷」の始めには

本来は古代中国の東に位置する山東省あたりの人々に対する呼び名であったが、秦以降は朝鮮半島、日本列島などに住む異民族を指すようになった。

とある。



図 II03 殷の時代 BC1100

この地図は、閉鎖になった「Yahoo!ジオシティーズ、中国東アジア歴史地図」にあった BC1100 年の地図から部分的に写したものである。

商(殷)は太行山脈の南端近くの東側で、洛陽の対岸の少し北、周は黄河が北に曲がるあたりで、西安の対岸の少し北にある。黄河の中流域と平野部の下流域にかけての地域であり、現在の中国の主要部は北京から広州を結ぶ地帯であるであり、これらの地域は周の始めには辺境であった。

Wiki「縄文海進」では次のように説明している。

縄文海進は、最終氷期の最寒冷期後(約 19,000 年前)から始まった海水面の上昇を指し、日本など氷床から遠く離れた地域で 100 メートル以上の上昇となり(年速 1 - 2 センチメートル)、ピーク時である約 6,000 年まで上昇が続いた(日本では縄文時代)。現在はピーク時から海水面は約 5 メートル低下した。またピーク時の気候は現在より温暖・湿潤で平均気温が 1-2℃高かった。

この海進が中国でも起きたとすれば、河南省から河北省にかけての海水面はかなり高かったはずである。

この後の海退の後で農耕が発展したことが殷王朝の成立となっただのではないか。さらに農耕が発展することにより、春秋・戦国の分裂状態になったと考える。

殷の次の周の政治は封建制であると言われている。

Wiki「封建制」では、

封建制は、君主の下にいる諸侯たちが土地を領有してその土地の人民を統治する社会・政治制度。諸侯たちは、領有統治権のかわりに君主に対して貢納や軍事奉仕などといった臣従が義務づけられ、領有統治権や臣従義務は一般に世襲される。日本史においては主に、鎌

倉時代から江戸時代にかけての「武家の世」の社会・政治制度を表す言葉として用いられている。封建制は、中国古代の統治制度に由来する概念であるとともに、ヨーロッパ中世の社会経済制度であるフューダリズムの訳語でもあり、2つの意味が相互に影響している面もある。

中国では、封建制と郡県制の是非について「歴千百年」の議論が続いた。

日本では中国古典とともに封建制の概念も持ち込まれ、頼山陽など江戸時代の知識人は、鎌倉幕府成立以来の武家政権体制を中国古代と似たものと考え、封建制の概念を用いて日本史を論じた。明治維新で実施された版籍奉還や廃藩置県には、こうした頼山陽らの封建制についての議論が影響している。

ヨーロッパ特にドイツでは、中世を特徴づける社会経済制度としてフューダリズム (Feudalism) やレーエン (Lehen) が盛んに研究されていた。明治時代半ばにレーエンを中心にフューダリズムが日本に紹介されると、フューダリズムと封建制は類似しているとされ、フューダリズムの訳語として封建制が用いられるようになった。



**回り道** 封建時代は停滞の時代や閉ざされた時代のようにいわれている。ヨーロッパの中世は大きな歴史的事件は少なく、政治史的には停滞していたのかもしれない。3 地方では細部は異なるであろうが、各国は自国の繁栄のために努めたはずである。これは、富が地方に保存されることになる。

日本の地方の名産・郷土料理のうち、この江戸時代に形成されたものは少なくないと想っている。ヨーロッパの古い都市の多くはこの時代に領主の居城として築かれた。大司教も封建領主であったことは興味深い。教会のネットワークを通じての情報の流通が為されたのではないかと思う。

印度は地方政権であっても、封建的ではなく、それ以前の段階(部族国家の並立)ではなかったかと思っている。

朝鮮半島の状況は李氏朝鮮の体制がどうであったかであるが、Wiki「李氏朝鮮」を見ていると、律令制のようである。Wiki「律令」からは、新羅律令は唐の律令と同じという説と、独自律令という説がある。ベトナムも似た状況のようである。

封建制の後群雄割拠の時代(戦国時代)から絶対王政の時代となる。封建時代に築かれた base を基に、さらに発展し、現代に続いている。

中国では、戦国時代の後秦帝国ができ、この体制が清まで続いた。

日本では、鎌倉時代と江戸時代では似ている面と異なる面が見られる。主従契約という面からは、鎌倉時代のほうがヨーロッパの封建制に近いような気がする。

朝鮮にはこのような封建制と群雄割拠の時代がなかった。日本の律令政治が完成した時期に、朝鮮にも同じような政治形態ができた。朝鮮のほうが早かったかもしれない。日本は鎌倉時代以降形骸化していったが、朝鮮では、大韓帝国成立まで続いた。封建制の欠如は地方の自立と妨げとなったのではないか。

周の時代は西周と東周に分けられ、後者は春秋時代と戦国時代に分かれる。この間、黄河下流域が発展し、中国の主体となる。あるいは中国が成立したといってもいいかもしれない。春秋時代には孔子が現れた。

戦国時代は面白い時代であり、日本の戦国時代と似ているところがあるが、日本の戦国時代は日本という国家が出来上がった後の出来事であるが、中国の場合は中華帝国ができる途上である。この時代

にその後の中国の基盤となる思想ができ、領域も黄河下流域にまで広がった。我々が聞く中国故事にはこの時代のものも数多くある。

Wiki「諸子百家」では

諸侯やその家臣が争っていくなかで、富国強兵をはかるためのさまざまな政策が必要とされた。それに答えるべく下克上の風潮の中で、下級の士や庶民の中にも知識を身につけて諸侯に政策を提案するような遊説家が登場した。諸侯はそれらの人士を食客としてもてなし、その意見を取り入れた。さらに諸侯の中には齊の威王のように今日の大学のようなものを整備して、学者たちに学問の場を提供するものもあった。

とある。この時代に中国を代表する建造物である長城が造られた。騎馬戦法による北狄に対して、歩兵による集団戦法の中国の各国が対抗するには有効であったはずである。このような巨大建造物を造ることが出来るほど発展したということも言える。

Wiki「万里の長城」では

戦国時代には外敵に備えるために戦国七雄のすべての国々が長城

を建設していた。北方の敵に備えるためのものだけではなく、齊や韓、魏や楚のように北方遊牧民族と接していない国も、特に警戒すべき国境に長城を作っていた。そのなかで、北の異民族に備えるために北の国境に長城の建設を行っていたのは燕、趙、秦の3ヶ国であった。

とある。

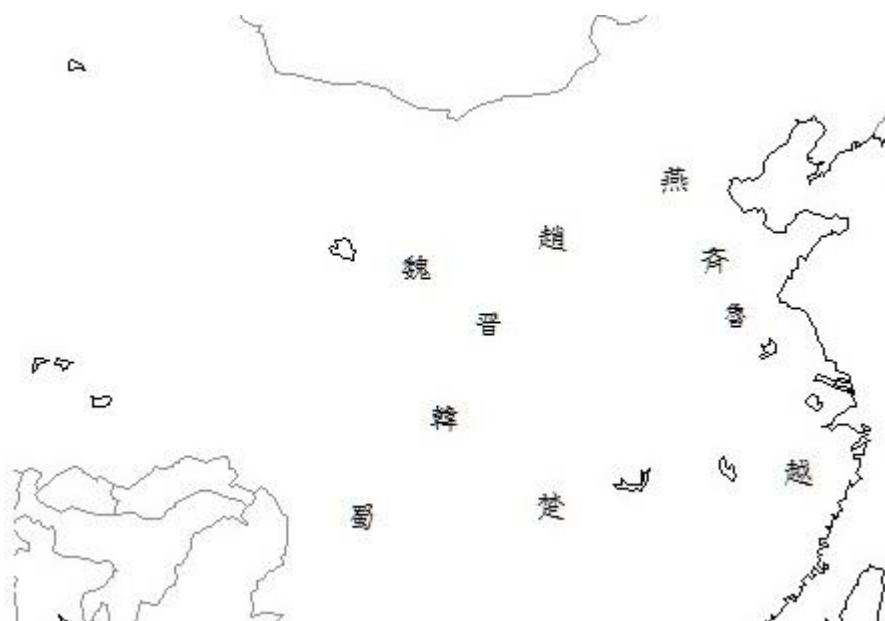


図 II04 戦国時代 BC8C

戦国時代は秦による統一で終了した。東夷に関しては、秦の時代に遼東郡が設置された程度である。

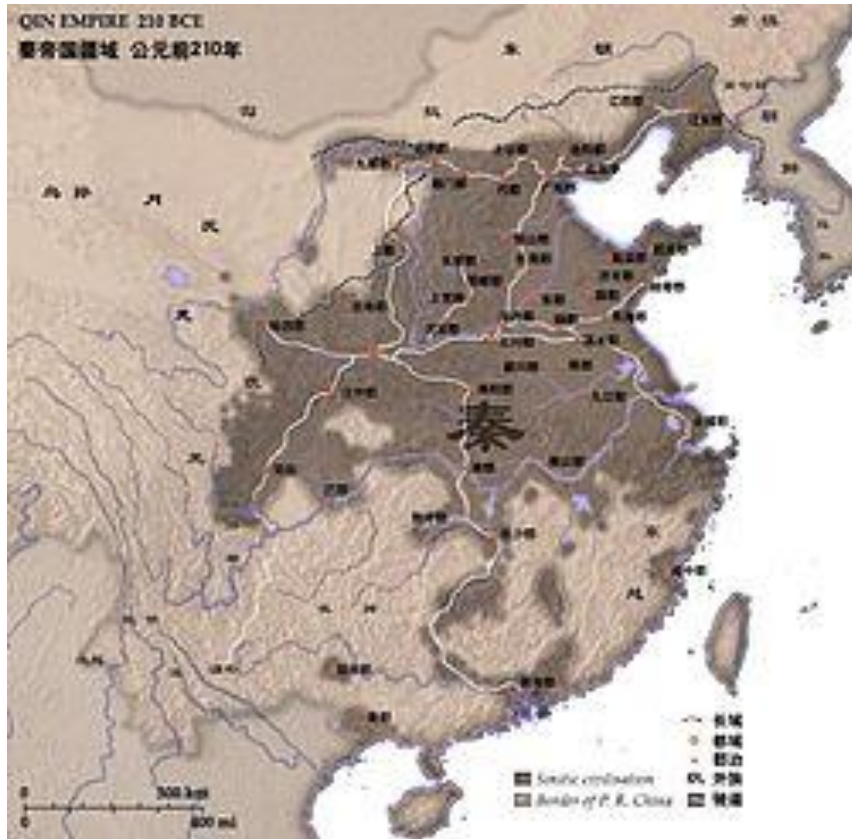


図 II05 秦帝国の版図 BC210 年 (Wikik「秦」)

図 II05 は Wiki「秦」のものである。東胡が書かれているので、引用した。肅慎と朝鮮はあった可能性が高いがわからない。朝鮮の上に高句麗、下に馬韓が書かれている。衛氏朝鮮ができたのが BC200 年頃であるので、高句麗・馬韓は BC210 年にはなかったと思われる。

秦とともに匈奴も勢力を強めたようである。Wiki「匈奴」では、

紀元前 215 年、秦の始皇帝は將軍の蒙恬に匈奴を討伐させ、河南の地(オルドス地方)を占領して匈奴を駆逐するとともに、長城を修築して北方騎馬民族の侵入を防いだ。

と書かれている。BC200 年頃に匈奴は冒頓単于が登場すると、月氏と東胡を滅ぼした。月氏は西に敗走し、最終的にはガンダーラに国を建てた。東胡の生き残りで烏桓山に逃れた勢力は烏桓となり、鮮卑山に逃れた勢力は鮮卑となった。更に東に逃げ延びた勢力がいたとしたら面白いのだが何も資料がない。

秦の次の王朝は漢である。武帝 BC141-BC87 は BC100 年頃に衛氏朝鮮を滅ぼし、朝鮮四郡を設置した。真番郡と臨屯郡はすぐに廃止されたが、楽浪郡は 313 年に高句麗により滅ぼされるまで続いた。また、張騫を西域に派遣した。

8-23 年の間の新を経て、23 年に光武帝により(後)漢が再興され、220 年まで続いた。桓霊の間の桓帝 146-167 と霊帝 167-189 はこの王朝の皇帝である。後漢が衰退したとき、遼東太守の公孫度は自立を強め、楽浪郡を支配し、その南部に帯方郡 204-313 を置いた。

後漢の次は三国志演義よく知られている魏・呉・蜀の三国時代 220-265 である。それぞれに国の書があるが、東夷伝のあるのは魏書である。魏書の倭人条は他の正史の倭条と比べて情報が多い。女王国への道程が書かれているのは他にはないことである。

三国志演義で描かれているように、魏は呉・蜀と戦っていた。このとき、背面の高句麗の存在は直接的の脅威はなかったかもしれないが、かなりの問題であったと考えられる。もともと、高句麗は遼東郡に対する侵略は絶えず試みていた。また、匈奴などの北狄の側面となる。さらに、その背面の東夷の状況もかなりの関心事であったはずである。

三国は司馬氏により統一され晋 265-317, 317-420 となった。本紀には東夷〇〇国と百済の朝貢が書かれ、東夷伝には馬韓が書かれている。313年に楽浪郡と帯方郡が滅びた。この後の朝貢は直接王朝の都へ行くことになる。

この後は南北朝の時代になる。境界は黄河と揚子江の間で、山東と共に、勢力によりわかれていた。最初の王朝は北朝では北魏 386-534 で、南朝では宋 420-479 であった。

倭条は南朝系の史書にあるが、北朝系の史書にはない。倭は南朝に朝貢し、北朝には朝貢していなかったと考える。これは興味あることである。

晋書の次の宋書には倭の五王が書かれている。南齊書にのみ加羅条がある。また、梁書の高句麗の王統が一番詳しいものである。南朝の正史にこのような記録が残っていたのは興味あることである。なお、南朝の位置は、北を攻略できた時以外は、ほぼ三国時代の呉の領域である。

北魏は仏教の伝播に関して大きな役割を果たしている。魏書にある高句麗と百済への仏伝は早く、これにない倭と新羅への仏伝は遅れたことはこのせいかもしれない。

Wiki「南北朝時代（中国）」の初めの部分を引用する。

南北朝時代は、北魏が華北を統一した439年から始まり、隋が中国を再び統一する589年まで、中国の南北に王朝が並立していた時期を指す。

この時期、華南には宋、齊、梁、陳の4つの王朝が興亡した。こちらを南朝と呼ぶ。同じく建康(建業、南京)に都をおいた三国時代の呉、



東晋と南朝の4つの王朝(宋・齊・梁・陳)をあわせて六朝と呼び、この時代を六朝時代とも呼ぶ。この時期、江南の開発が一挙に進み、後の隋や唐の時代、江南は中国全体の経済基盤となった。南朝では政治的な混乱とは対照的に文学や仏教が隆盛をきわめ、六朝文化と呼ばれる貴族文化が栄えて、陶淵明や王羲之などが活躍した。

また華北では、鮮卑拓跋部の建てた北魏が五胡十六国時代の戦乱を収め、北方遊牧民の部族制を解体し、貴族制に基づく中国的国家に脱皮しつつあった。北魏は六鎮の乱を経て、534年に東魏、西魏に分裂した。東魏は550年に西魏は556年にそれぞれ北齊、北周に取って代わられた。577年、北周は北齊を滅ぼして再び華北を統一する。その後、581年に隋の楊堅が北周の譲りを受けて帝位についた。589年、隋は南朝の陳を滅ぼし、中国を再統一した。

Wiki「六朝」では

六朝時代は、中国における宗教の時代であり、六朝文化はこの時代に興隆した宗教を基に花開いた。一方では、後漢代に盛行した神秘的傾向の濃厚な讖緯の説・陰陽五行説の流れの延長上に位置づけられる。また、後漢末より三国に始まる動乱と社会の激変に伴う精神文化の動揺が、従来の儒教的な聖人を超越した原理を求める力となった

ものと考えられる。

儒教では、魏の王弼が、五行説や讖緯説を排した立場で、経書に対する注を撰した。それと同時に、老荘思想の影響を受けた解釈を易経に施したことで、その後の晋および南朝に受け入れられることとなった。その一方で、北朝では、後漢代の鄭玄の解釈が踏襲され、経学の南北差を生じさせるに至った。

魏晋の貴族社会は、清談が尊重された時代であり、王弼や何晏が無為の思想に基づいた清談を行い、それが正始の音として持て囃された。次いで、竹林の七賢が、思想的・文学的な実践によって、それを更に推進した。その後、郭象が老荘の思想（玄学）を大成した。

仏教の伝来は、後漢代のこととされる。但し、伝来当初は、外来の宗教として受容され、なかなか浸透しなかった。六朝代になると、後漢以来の神秘的傾向が維持され、老荘思想が盛行し、清談が仏教教理をも取り込む形で受け入れられたことから、深く漢民族の間にも受容されるに至った。そこで重要な役割を果たしたのは、仏図澄・釈道安であり、道安は鳩摩羅什の長安への招致を進言し、その仏教は門弟子である廬山の慧遠の教団に継承された。慧遠は沙門不敬王者論を著して、覇者の桓玄に対抗した。

道教は、後漢代の五斗米道に始まる。その教団が三国の魏によって

制圧されると、一時、その系統は表には現われなくなるが、4世紀初頭に、葛洪が現われ、抱朴子を著わして不老不死を説く道教の教理体系を整備した。この時代の道教信徒として知られるのは、書聖の王羲之である。その系統は、南朝梁の時代の陶弘景に受け継がれ、茅山派(上清派)道教の教団が形成された。一方、北朝では、寇謙之の新天師道が開創され、やはりその制度面での整備が、仏教教理も吸収する形で行なわれた。

秦以降の中国の王朝は 300 年程で滅亡している。統一王朝による支配と、その滅亡における分裂状態を繰り返して来た。分断状態の大きいものは、秦の前の春秋・戦国時代、晋の滅亡後の五胡十六国・南北朝の時代と、唐滅亡後の五代十国の時代である。面白いのは、文化的にはこの分裂状態のほうが充実していると思われることである。現在我々が用いている中国由来の文化の多くは、この時代と南北朝の時代に生まれたか発展したものと考えている。

**回り道** 中央集権国家は、もともと、全国の富を収奪する組織と考える。黄河の治水のために王朝が発展したと聞いたことがある。中国の場合、周辺諸民族の侵略を防ぐほうが大きいと考える。城砦を攻めるに

は、敵の 2 から 3 倍の兵力が必要とされている。逆に言えば城を維持するには、敵の 1/2 から 1/3 の兵力が必要ということになる。防御のための幾つかの支城を維持するには相当の兵力を必要とした。中国王朝に侵略できたのは北狄と呼ばれる北方遊牧民族である。古代で最強のものは匈奴であった。匈奴に勝ったのは漢の武帝の時代である。戦国時代は遊牧民も強大でなく、現在の省規模の燕でほぼ防げていたようだ。

巨大帝国を維持するためには、

A:個人や集団のできる自衛組織を圧倒する軍事力、

B:命令を伝える仕組み、

C:税を徴収し中央に運ぶ仕組み

の 3 つは重要であろう。A は王朝の成立時から備わっている。通信技術が未発達な時代は、B と C はほぼ同じ組織でできた。

統一王朝では、その市場の大きさから、巨大商人が出現する。また、外敵に備えるための軍隊は、外敵の圧力が低い時には、余剰兵力となる。このような商人と王朝の軍事力が一体となって大きくなっていったのかもしれない。軍需物資の安定供給には商人の存在が不可欠であったと考えられる。政商と官僚の癒着で政治が行われる。帝紀の

何処か(おそらく後漢の)で、錢5万貫で侯になったとあった。

人民解放軍は共産党の中国支配のための存在と言われている。国家成立のために倒す敵が外部ではなく国内に居たということによるのではないか。最近は何からの業務である外敵の防御と周辺国家への侵略も思い出したように始めたようである。ただし、中国としては、周辺国家と想っていないかもしれない。中華帝国の冊封体制にあった国は全て領内とする発想である。

冷戦中の2超大国は Union of Soviet Socialist Republics と United States of America であった。共に連邦国家であった。両者と異なる点を考えると、商業(金融資本)が発達しているかいないかだろうか。この意味では、現在の中国は産軍連邦国家(王朝)と言えるのかもしれない。

## 5.2. 東胡と月氏

東胡と月氏は東夷ではなく、北狄(北夷)であるが、東夷と接しているため東夷にも何らかの影響があったはずである。両者を駆逐した匈奴は中国の王朝にとっては死活にかかわる重要事項であった。また、このステップ地帯を通して製鉄が伝播したという研究もあり、匈奴時代の製鉄遺跡が発掘されたとの報告もある。(「IRON ROAD・和鉄の道」 <http://www.infokkna.com/ironroad/dock/iron/l5ironl8.pdf> ) 騎馬戦術とともに鉄製の武器も匈奴の強勢の原因であったかもしれない。

正史の関連する列伝を見るべきであるが、現在その余力はない。匈奴は直接の戦闘があり、列伝だけではなく、帝紀も見る必要がある。ここでは、東胡と月氏に関し、Wikipedia の記事からの抜き取りに留める。

Wiki「月氏」では

月氏は紀元前 3 世紀から 1 世紀ごろにかけて東アジア、中央アジアに存在した遊牧民族とその国家名。紀元前 2 世紀に匈奴に敗れてからは中央アジアに移動し、大月氏と呼ばれるようになる。大月氏時

代は東西交易で栄えた。

秦の始皇帝の時代、中国の北方では東胡と月氏が強盛であった。一方、匈奴は東胡や月氏の間接支配を受けていたが、東胡を滅ぼし、月氏を敗走させ、次いで南の楼煩、白羊河南王を併合し、漢楚内戦中の中国にも侵入し、瞬く間に大帝国を築いた。

匈奴は(前)漢の武帝の元狩 4 年 BC119 に衛青と霍去病の遠征により大敗することになる。

Wiki「東胡」では

東胡は中国の春秋戦国時代から秦代にかけて内モンゴル東部—満州西部に住んでいた遊牧民族で、匈奴により滅ばされ、烏桓山に逃れた勢力は烏桓となり、鮮卑山に逃れた勢力は鮮卑となった。

と書かれている。三国志では烏桓鮮卑東夷伝とあるように、烏桓・鮮卑は東夷には属さない。この後の鮮卑の東への移動が倭国大乱の遠因となったと考えている。

Wiki「烏桓」では、

建武 25 年 49、烏丸の大人郝旦ら 9000 余人が部下を引き連れて漢の朝廷にやってきた。その主だった指揮者が王や侯に封ぜられ、その数は 80 人以上にもものぼった。彼らを長城の内側に居住させ、遼東属国、遼西、右北平、漁陽、広陽、上谷、代郡、雁門、太原、朔方の諸郡に分けて住まわせ、同じ烏丸族の者たちを内地に移るよう招き寄せた。彼らに衣食を給し、護烏丸校尉の官を置いてその統治と保護にあたらせた。こうした施策の結果、烏丸は漢のために塞外の偵察と警備の任にあたり、匈奴や鮮卑に攻撃を加えるようになった。

と書かれている。さらに、

Wiki「鮮卑」では

殤帝の延平元年 106、鮮卑は東への移動を始め、長城の中に入って漁陽太守の張頭を殺した。安帝 107-125 の時代、鮮卑の大人の燕荔陽が入朝した。朝廷は彼に鮮卑王の印綬を授けた。これ以後、鮮卑は、あるときは反抗し、あるときは降伏し、あるときは匈奴や烏丸と争った。順帝の時代、再び長城の内部に侵入し、代郡の太守を殺した。漢と烏丸に敗れた結果、鮮卑の 3 万余落は、遼東郡の役所に降服を申し入れてきた。桓帝の時代、投鹿侯の子、檀石槐が大人の位に就くと、



高柳の北、300 余里の弾汗山、啜仇水のほとりにその本拠を置いた。その兵馬は勢い盛んで、南は漢の国境地帯で略奪を働き、北では丁令の南下を阻み、東では夫余を撃退させ、西では烏孫に攻撃をかけた。かつての匈奴の版図をまるまる我が物とし、東西は 1 万 2000 余里、南北は 7000 余里にわたって、広大な地域をすっぽり手中に収めた。靈帝の時代になると、彼らは幽州、并州の 2 州で盛んに略奪を行い、国境地帯の諸郡は、鮮卑から酷い損害を受けない年はなかった。

フン族の移動がゲルマン民族の大移動を誘発したように、鮮卑族の移動が扶余系民族の移動を誘発し、東夷に影響を与えたのではないか。桓靈間の倭国大乱の遠因になったのではないかと想っている。

次の大月氏の話は遊牧系の民族の国家形成に関し示唆に富むものである。

Wiki「月氏」の大月氏では

その後も敦煌付近にいた月氏であったが、漢の孝文帝の時代に匈奴老上单于配下の右賢王の征討に遭い、月氏王が殺され、その頭蓋骨は盃(髑髏杯)にされた。王が殺された月氏は二手に分かれ、ひとつがイシク湖周辺へ逃れて大月氏となり、もうひとつが南山羌(現在の青

海省)に留まって小月氏となった。

イシク湖周辺に逃れていた(大)月氏は、もともとそこにいた塞族の王を駆逐してその地に居座った。しかし、老上単于 BC174-BC161年の命により、烏孫の昆莫が攻めてきたため、大月氏はまた西へ逃れ、最終的に中央アジアのソグディアナ(粟特)に落ち着いた。そこでアム川の南にあるトハリスタン(大夏)を征服し、その地に和墨城の休密翁侯、雙靡城の雙靡翁侯、護澡城の貴霜翁侯、薄茅城の肸頓翁侯、高附城の高附翁侯の五翁侯を置いた。

一方、前漢では武帝の時代に張騫を使者とした使節団を西域に派遣した。張騫は匈奴に捕われるなどして10年以上かけ、西域の大宛、康居を経て、ようやく大月氏国にたどり着いた。この時の大月氏王はかつて匈奴に殺された先代王の夫人で、女王であった。大月氏女王は張騫の要件を聞いたが、すでに復讐の心は無く、国家は安泰しており、漢が遠い国であるため、同盟を組むことはなかった。

このクシャーナ朝は仏教の発展で重要である。仏像はこの王朝が支配していたガンダーラで初めて造られた。

政体的には、`五翁侯を置いた`ということが気になる。高句麗の五族を連想させる。部族連合から始まり、それらと100年を超える抗

争から、1つの部族で父子継承が行われていき、クシャーナ朝になったということである。

高句麗は新の時代には東に逃走させられる程の攻略を受けたように、中国の圧力があり、内部抗争の余裕がなかったと考えられる。あるいは、内部抗争も玄菟郡の介入があり、短期に決着がついたのかもしれない。

壁画古墳などで高句麗との類似性が言われている倭でも同様なことが起きたのではないかということが言えるのか言えないのか。また、女王がいたことも注目される。高句麗・百済にはいなかったが、倭・新羅では複数の女王がいた。他に女王が目立つ国はイギリスである。どこで見たか記憶がないが、(中国北方)遊牧民では、夫人が王となることがあるということである。

東胡の一部にはさらに東に逃げて、扶余となったのは妄想に近いものだが話としては面白い。これは、`世界の村で発見こんなところに日本人`の中で、「キルギスでは日本人と同祖との伝承がある。肉好きの人はキルギス人に、魚好きの人は日本人になった」という言い伝えが語られていた。匈奴に滅ぼされた時、西へ逃げた人がいたとしても不自然ではない。

### 5.3. 東夷諸国

唐書までの東夷伝に、朝貢が記されている東夷の国々を表にする。

表 II02 正史に現れる東夷と朝貢

|     | 後漢書 | 三國志 | 晋書 | 宋書 | 南齊書 | 梁書 | 魏書 | 周書 | 隋書 | 南史 | 北史 | 旧唐書 | 新唐書 |
|-----|-----|-----|----|----|-----|----|----|----|----|----|----|-----|-----|
| 扶余  | ○   | ○   | ○  |    |     |    |    |    |    |    |    |     |     |
| 邑婁  | ○   | ○   |    |    |     |    |    |    |    |    |    |     |     |
| 肅慎  |     |     | ○  |    |     |    |    |    |    |    |    |     |     |
| 勿吉  |     |     |    |    |     |    | ○  |    |    |    |    | ○   |     |
| 裨離  |     |     | ○  |    |     |    |    |    |    |    |    |     |     |
| 東沃沮 | ○   | ○   |    |    |     |    |    |    |    |    |    |     |     |
| 北沃沮 | ○   |     |    |    |     |    |    |    |    |    |    |     |     |
| 靺鞨  |     |     |    |    |     |    |    |    | ○  |    |    |     |     |
| 濊   | ○   | ○   |    |    |     |    |    |    |    |    |    |     |     |
| 高句麗 | ○   | ○   |    | ○  | ○   | ○  | ○  | ○  | ○  | ○  | ○  | ○   | ○   |
| 馬韓  | ○   | ○   | ○  |    |     |    |    |    |    |    |    |     |     |
| 辰韓  | ○   | ○   | ○  |    |     |    |    |    |    |    |    |     |     |
| 弁辰  | ○   | ○   | ○  |    |     |    |    |    |    |    |    |     |     |
| 百濟  |     |     | ○  | ○  | ○   | ○  | ○  | ○  | ○  | ○  | ○  | ○   | ○   |
| 新羅  |     |     |    |    |     | ○  |    |    | ○  | ○  | ○  | ○   | ○   |
| 加羅  |     |     |    |    | ○   |    |    |    |    |    |    |     |     |
| 倭   | ○   | ○   | ○  | ○  | ○   | ○  |    |    | ○  | ○  | ○  | ○   | ○   |
| 日本  |     |     |    |    |     |    |    |    |    |    |    | ○   | ○   |
| 扶桑  |     |     |    |    |     | ○  |    |    |    | ○  |    |     |     |
| 流求  |     |     |    |    |     |    |    |    |    | ○  |    | ○   |     |

この他に晋書本紀に東夷○○国の朝貢記事がある。

東夷伝が初めて書かれている後漢書の東夷伝では

秦併六國 其淮 泗夷皆散為民戸 陳涉起兵 天下崩潰 燕人衛満避地  
朝鮮 因王其國 百有餘歳 武帝滅之 于是東夷始通上京 王莽篡位 貊  
人寇邊 建武之初 復 來朝貢 時遼東太守祭彤威誓北方 聲行海錶 于  
是濊貊倭韓 萬里 朝獻

秦が六国を併合した時、其淮や泗夷は散り散りとなり民のみとなった。陳涉が蜂起し、天下が崩壊した。燕人の衛満は朝鮮に逃れ、そこで王となった。100年ばかり後、武帝が朝鮮を滅ぼしたとき、東夷が初めて都に詣でた。王莽が王位を篡奪した時、貊人が辺境を侵した。光武帝の建国の初めに、また朝貢してきた。この時、遼東太守の祭彤は北方を威圧した。このときより、濊貊倭韓は遠路朝献するようになった。

と書かれている。

Weblio「陳勝」では

陳勝?-BC209 は、秦代末期の反乱指導者。字は涉。劉邦や項羽に先んじて秦に対する反乱を起こしたが、秦の討伐軍に攻められて敗死した。字は涉。

と書かれている。なお、漢書列傳第一が陳勝項籍傳である。

北狄と比べて東夷は殆ど直接の脅威とはならなかった。中国の王朝が東夷と直接接したのは、漢の武帝による衛満の征討が最初である。この後、漢・三国・南北朝の時代では、高句麗が中国の圧力が弱くなった時に、遼東郡を侵略した程度である。

中国王朝が直接戦った東夷は、隋・唐での高句麗、唐の時代の百済・倭、鎌倉時代の元寇、秀吉の朝鮮出兵、および、日清戦争である。アメリカ合衆国も東の国であるから、東夷といえなくもない。

**回り道** 朝鮮戦争を、中国王朝が他国と朝鮮半島で行った戦争と拡大解釈すれば、数回の朝鮮戦争が起きたことになる。

**白村江：**（第1次朝鮮戦争） 高句麗が唐に滅ぼされた後は、百済と新羅の戦いが始まるのは自然の勢いである。新羅のほうが優勢で、劣勢の百済が日本に援助を求めた。ここで、新羅が唐に援助を求め、唐と日本が応援で参戦した。

白村江での敗戦 663 により、日本は朝鮮半島から完全に撤退することになった。

**文禄・慶長の役：**（第 2 次朝鮮戦争） 朝鮮における李朝に反する勢力・日本(秀吉)と李氏朝鮮・明の戦い。進攻の速度から朝鮮側に協力者(道案内、情報提供)が居たと思われる。翻ってみれば、秀吉に朝鮮攻略を想いつかせるには、朝鮮側からの働きかけがあったと思われる。

**日清戦争：**（第 3 次朝鮮戦争） 朝鮮をめぐって日本と清による戦争。路線を巡る李朝内部の抗争に日本と中国が介入した。

**朝鮮戦争：**（第 4 次朝鮮戦争・無印朝鮮戦争） 1950 年に起きたものである。

## 5.4. 朝鮮の王朝

唐成立までの朝鮮の王朝を図に示す

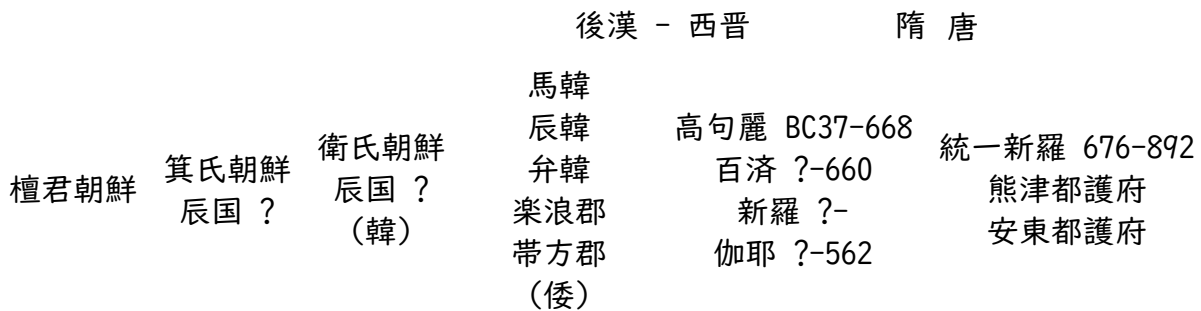


図 II06 朝鮮の王朝

この表は、Wiki「李氏朝鮮」にある表の統一新羅までの王朝の図に若干の部分的変更を加えたものである。この後は分裂、高麗・元の支配・李氏朝鮮・大韓帝国と続く。なお、高句麗が朝鮮を版図に加えるのは、樂浪郡を滅ぼした後である。

漢書地理志の樂浪郡では、県のリストの筆頭が朝鮮県となっているが、武帝の登場までは、遼東郡が最東端の郡であり、その東には、衛氏朝鮮のみが知られていたと考えている。



図 II06 に挙げられている国で、衛氏朝鮮以降は存在したというのが定説である。檀君朝鮮は正史の東夷伝には現れない。箕氏朝鮮と辰国はその国の記事はないが、他との関連で名前は現れる。

正史からは箕準が韓王を名乗った以外、韓という国は存在しない。

**寄り路** 日本が朝鮮に傀儡政権をつくる時、日本では三韓征伐で名は知られていたが、朝鮮では国としては認められていなかった韓を採用して、国名を大韓帝国としたのではないかと想像している。

## 箕氏朝鮮

正史では箕氏朝鮮という国は現れないが、朝鮮王 箕準 は東夷伝に書かれている。これは中国の王朝とは直接の関係がなかったことによるのではないか。

Wiki「箕子朝鮮」では、

箕子朝鮮 BC12C-BC194 とは、中国の殷に出自を持つ箕子が建国し

たとされる朝鮮の伝説的な古代国家。古朝鮮の一つ。首都は王險城（現在の平壤）。三国志魏志東夷伝辰韓条・魏略逸文などに具体的な記述があり、考古学的発見からは、箕の姓を持つ人々が殷朝から周朝にかけて中国北部に住んでおり、殷朝から周朝への時代変化とともに満州、朝鮮へと移住した可能性が指摘されている。

史記 卷三十八 宋微子世家 第八 では

微子開者 殷帝乙之首子而帝紂之庶兄也 . . . 箕子者 紂親戚也

微子開は殷帝の乙の長子で、帝紂の庶兄である。 . . . 箕子は紂の親戚である。

に続き、箕子と紂王の話が書かれている。さらに、箕子と周の武王の対話の後、

於是武王乃封箕子於朝鮮 武王は箕子を朝鮮に封じた。

と書かれている。

ピンイン 微: wēi、箕: jī、濊: wèi

周の武王は周の創設者で紀元前 1043 年に没した。この時代に朝鮮半島に王を封じるということは疑わしい。

次の記事は 4.1 節で取り挙げた。

**朝鮮王準為衛滿所破 迺將其餘衆數千人走入海 攻馬韓 破之 自立為韓王（後漢）**

次の三国志の記事は後漢書と同様として、省略した。

**爲燕亡人衛滿所攻奪 將其左右宮人走入海 居韓地 自號韓王 其後絶滅 今韓人猶有奉其祭祀者（三）**

侯准は既に王を僭称していた。衛滿が衛氏朝鮮をつくるとき BC195 に、敗れた朝鮮王箕準は家臣と一族とともに韓の地に逃れ、韓王となった。その家系は絶たれたが、今も韓では韓王を祭る人がいる。

滅条に次の記事が書かれている。

**昔(周)武王封箕子于朝鮮 箕子教以礼儀田蚕 …… 其后四十余世 至朝鮮侯准自称王（後漢）**

昔(周の)武王が箕子を朝鮮に封じた。箕氏は礼儀を以て田や蚕を教えた。…その後四十代あまりたって、朝鮮侯の准は王を自称した。

**昔箕子既適朝鮮 作八條之教以教之 無門戸之閉而民不爲盜 其後四十餘世 朝鮮侯准既僭號稱王（三）**

昔箕子は朝鮮にたどりついた。八條の教えを作りこれを教えた。門戸を閉めることはないが盗みはない。その後 40 世を経て、朝鮮侯准は王を僭称した。

箕准が逃れた先は後漢書では馬韓となっている。この時に馬韓があったことになるのか。これは、後漢書成立時に馬韓と呼ばれた地としておく。また、辰王はどう関わるのか。

箕准は朝鮮侯とあり、これは中国の王朝から認められたものと思われる。侯は県規模の首長に与えられる爵位である。

図 II01[箕子朝鮮と辰国] を見ていると、濊が朝鮮半島の南部にあり、その北に東濊、沃祖を隔てて濊貊がある。まるで箕氏朝鮮を取り囲んでいるようである。これから、濊がいるところに箕氏朝鮮が造られたのではと思われる。なお、この濊貊の位置は後に高句麗が造られるところである。箕子朝鮮の南限は曖昧で、京城辺りが燕の先住者の韓氏の一部が移った所とすれば、この地に逃れた箕准が韓王と名乗ったのは理解できる。

Wiki「燕（春秋）」に次が書かれている。

燕の始祖は周建国の元勳である召公奭である。成王の時現在の北京近辺に移った。このため国名を燕といった。またこの時、現地にあった韓侯国が入れ替わりに現在の陝西省に移った。燕に残った韓の

旧住民は多く韓氏を名乗った。

西周時代、燕の東方(現在の遼寧省朝陽市喀刺沁左翼自治旗)に燕の属国で箕侯という都市国家があったが、北方遊牧民に滅ぼされ、燕に亡命した住民が多かったらしい。春秋時代以降、燕の士大夫層に韓や箕を氏とする者がみられる。

この記事が箕の現れるもののうち、最も年代の古いものである。

Wiki「召公セキ」では

召公セキは、周朝の政治家。姓は姫、諱は奭。太公望や周公旦と並び、周建国の功臣の一人である。武王の殷朝打倒を補佐し、その功績により燕(現在の河北省北部)に封じられ、都城を薊(現在の北京)と定めた。燕には長子の克を赴任させ、自らは鎬京(現在の陝西省西安市)に留まった。

と書かれている。

周時代に中国の国の最東端にある燕の国に韓氏が、その東方に箕氏が居たことは興味あることである。次のことを思い付くが、想像の

域である。

召公が燕に封じられたとき、韓の住民の一部は、陝西省に移らずに、陝西省より近い朝鮮半島に移住したことも考えられる。国を造ったかどうかは判断できない。恐らく、国を造るには到らず部族連合であったかもしれない。その後、箕氏の部族が平壤付近に移住し国を造った。韓氏は追われて南部に移住した。この箕侯は濊貊系で、滅ぼした北方遊牧民は夫餘であったかもしれない。また、Wiki 召公セキから、召公が燕に封じられたのは武帝のときである。

周の創始者武王が封じたか、西周時代、燕の東方にあった箕侯という都市国家が、北方遊牧民に滅ぼされ、燕に亡命したという2つの起源が考えられるが、西周時代に箕氏朝鮮が造られた。長は侯であった。最後の朝鮮侯準(准)は馬韓(の地)に逃れ、韓王を名のった。

**衛氏朝鮮** については、4章の序で述べたことが理解したものの殆どであるため、省略する。

## 5.5. 朝鮮四郡・帯方郡

(前)漢の武帝は BC108 年に朝鮮四郡と呼ばれている樂浪・臨屯・玄菟・真番の 4 郡を朝鮮に設置した。武帝の在位期間は BC141 年から BC87 年でその没後、BC82 年に臨屯・真番の 2 郡は廃棄され、玄菟郡は西に移動された。漢書地理志と後漢書地理志共に樂浪郡と玄菟郡が載っている。

四郡の前に設置された遼東郡に関しては、Wiki「遼東郡」に、

戦国時代、燕が北方の異民族を防ぐ目的で上谷郡・漁陽郡・右北平郡・遼西郡・遼東郡を初めて設置した。紀元前 222 年、秦が燕を滅ぼすと、引き続き燕の故地に上谷郡・漁陽郡・右北平郡・遼西郡・遼東郡が設置された。

と書かれている。遼東郡は燕が初めて設置したが、中国王朝としては秦が始めて設置した。

武帝は初め蒼海郡を設置した。漢書武帝紀では

元朔元年 BC128 東夷葦君南閭等口二十八萬人降 為蒼海郡

東夷の葦君の南閭が二十八萬人を率いて投降してきた。そこを蒼海郡とした。

であるが

**三年 BC126 罷蒼海郡** 蒼海郡を廃棄した。

とあるように、すぐに廃棄された。

28 万人は誇張の感がする。これが武帝に朝鮮に注意を向けさせたのか。何もせずに投降することは普通あり得ない。衛氏朝鮮が弱まったことと、漢による働きかけはあったはず。衛氏討伐の前哨か。

**元朔二年 BC127 匈奴入上谷 漁陽 殺略吏民千餘人 遣將軍衛青 李息 出雲中 至高闕 遂西至符離 獲首虜數千級 收河南地 置朔方 五原郡**

匈奴が上谷郡と漁陽郡に侵入し、千餘人の民を殺略した。衛青將軍を派遣した。李息は雲中より、高闕と西の符離に至り、數千の首級を得た。河南地を治め、朔方郡と五原郡を置いた。

とある。この翌年に蒼海郡を廃棄したことになる。

蒼海郡の設置は最大の懸念である匈奴対策として側面を固めるためではなかったか。設置後 2 年で廃棄されたのは、遼東郡で十分とされたのではないかと考える。



**元封三年 BC108 朝鮮斬其王右渠降 以其地為樂浪 臨屯 玄菟 真番郡**

朝鮮がその王右渠を斬殺し投降してきた。その地を樂浪・臨屯・玄菟・真番郡とした。

衛氏朝鮮の地に4つの郡を置いたと書かれている。武帝はBC87年に亡くなった。この後、漢四郡の見直しが行われたようである。

北史では

**元封四年 BC107 武帝滅朝鮮 以高句驪為縣 使屬玄菟**

武帝が朝鮮を滅ぼしたとき、高句麗を県とし、玄菟郡の下に置いた。

と書かれている。

漢書地理志に書かれている玄菟郡と樂浪郡のデータは次である。

**玄菟郡 戸四萬五千六 口二十二萬一千八百四十五 縣三 高句驪 上  
殷台 西蓋馬**

**樂浪郡 戸六萬二千八百一十二 口四十萬六千七百四十八 縣二十五  
朝鮮 儼邯 溟水 含資 黏蟬 遂成 增地 帶方 駟望 海冥 列口 長岑**

屯有 昭明 鏤方 提奚 渾彌 吞列 東儻 不而 蠶台 華麗 邪頭昧 前  
莫 夫租

臨屯郡と真番郡は書かれていない。玄菟郡に西蓋馬があるが、東蓋馬はないのか。後漢書では、玄菟郡が6県、樂浪郡が18県となっている。



图 II07 漢四郡

図 II08 漢四郡 は Wiki「玄菟郡」のものである。この図が筆者の位置に関するイメージに一番近い。Xuantu は玄菟、Lelang は楽浪、Lintun は臨屯、Zhenfan は真番、Jin は辰であろう。Okjeo はわからない。

Wiki「楽浪郡」では

紀元前 108 年から西暦 313 年まで存在した。楽浪郡の住民は王氏が多く韓氏これに次ぎ、この二氏でかなりの率を占めていた。郡治所は朝鮮県(衛氏朝鮮の王險城、平壤)で、南部には南部都尉が置かれた。

前 82 年(始元 5 年)に廃止された臨屯郡北部の 6 県と玄菟郡の 1 県が編入された。紀元前 75 年、単単大嶺の東側の部分に楽浪東部都尉を置き、不耐城を治所として嶺東七県(東莞県、不耐県、蚕台県、華麗県、耶頭味県、前莫県、夫租県)に分けて治めさせ、官吏は濊(東濊)の民が務めた。

王莽による新朝では、楽鮮郡と改称された。

楽浪郡の郡治は箕氏朝鮮と続く衛氏朝鮮の王都を継続したと思われる。したがって、始めから郡治としての設備を構築することは容易であったはずである。

元封三年の段階では、朝鮮の拠点としての楽浪郡郡治の設定と、大まかに四郡の設置を行った。この時点では朝鮮半島の南部の状況は殆ど把握していなかったのではなかったか。

武帝の次の皇帝である昭帝の即位がBC86年である。この時点では、朝鮮半島の状況が把握できたことから、四郡の見直しがBC82始元五年に行われ、南部の維持はメリットが無いと判断されたのかと考える。

東夷に対しては、遼東郡の東から北に玄菟郡を置き、高句麗とその北・東にいる東夷を担当させ、楽浪郡に朝鮮半島の東夷を担当させる体制ができ、後漢末までこの体制が続いた。

Wiki「玄菟郡」では

第一玄菟郡：前107年(元封4年)に遼東郡の東・楽浪郡の北に隣接する地に設置され、幽州に属した。郡治は夫租県に置かれた。郡内の県は、夫租、高句驪、西蓋馬、上殷台の4県しかわからない。当時の戸数は45,006戸、人口は221,845人。当初の領域は遼東郡北端から出発して中朝国境地帯山岳部(吉林省東部と北朝鮮慈江道・両江道に跨がる地域)から咸鏡道を通り日本海に達する回廊状に県城が並んだものと推察してこれを玄菟回廊と呼ぶ学者もいる。

前 82 年(始元 5 年)に漢四郡のうち真番郡・臨屯郡が廃止されたとき、廃止をまぬがれたものの、夫租県が楽浪郡に編入された。玄菟郡の郡治は夫租県から変わって高句驪県(現在の吉林省集安市通溝郷)に移された。これで、玄菟郡領域のうち日本海沿岸部(咸鏡南北道)は夫租県とその周辺一帯を除いて大部分が放棄されたことになる。

第二玄菟郡：紀元前 75 年(元鳳 6 年)になると、玄菟郡は西へ縮小移転された。郡治の高句驪県は現在の遼寧省撫順市内の東部、新賓滿族自治県永陵鎮老城村(昔の興京)付近へ移され、元の場所には高句麗侯(後の高句麗王国の前身)が冊封された。

新の始建国 4 年(12 年)、王莽が高句麗を下句麗へ改名した為に、高句麗が玄菟郡を侵犯するようになる。後漢が成立すると光武帝建武 6 年 30 に楽浪郡東部都尉は廃止となり、嶺東 7 県の直接統治は放棄され、それぞれ県侯として冊封して独立させた(その一例として夫租葦君・夫租長の銀印などが発見されている。3 世紀の沃沮族の起源)。建武 8 年(32 年)に高句麗侯は再び冊封体制下へ組み込まれ、侯から王へ昇格された。

第三玄菟郡：107 年(永初元年)になると、遼東郡北部都尉の管轄

区を遼東郡から切り離して新しく玄菟郡とし、遼東郡に隣接していた旧玄菟郡を廃止、高句麗による領有を許可した。郡治の高句麗県は現在の瀋陽（瀋陽と撫順の間からやや瀋陽寄り）に遷された。諸県のうち、高句麗県・上殷台県・西蓋馬県の3県は、元々は玄菟郡にあった諸県の県名を移動させてきたものの残滓である。戸数は4万5006、口数は22万1845人。

高句麗との関係：高句麗王国を構成する5部族の前身が玄菟郡の5県の県侯だったとすれば、32年(建武8年)に王に冊封された段階で5部族の連合体としての王国が成立したともみえる。高句麗王国の王都丸都城は玄菟城が訛ったものである。後世に編纂された三国史記に記載された伝承では、高句麗は前37年に建国されたことになっており、これは第二玄菟郡の期間内にあたるため、中国側から高句麗侯と呼ばれた勢力が大雑把にほぼその頃の建国であることは信憑性があると考えられている。

BC75年に冊封された高句麗侯のちの高句麗国との関係は不明である。侯であるから県レベルの勢力であろう。この時点では漢が皇族・功臣以外を王としなかった可能性もある。

この高句麗縣にいた夫餘・濊・貊系の民族が高句麗国を造ったと考  
えるのは自然であるが、次の三国史記の記事から検討を要する。

### **瑠璃明王三十三年 13 王命烏伊・摩離 領兵二萬 西伐梁貊 滅其國 進 兵襲取漢高句麗縣**

王は烏伊・摩離に命じて、兵二万を率いて西の梁貊を討たせこれを滅ぼした。  
さらに兵を進め高句麗県を襲い収めた。高句麗県は玄菟群に属している。

この高句麗県は移転後の第 2 次高句麗県と考えられるが、これら  
は高句麗を扱うときの課題としておく。

Wiki「楽浪郡」では

郡治所は朝鮮県(衛氏朝鮮の王險城、今の平壤)に置かれ、郡の南部  
には南部都尉が置かれていた。

前 82 年(始元 5 年)には真番・臨屯が廃止され、臨屯郡北部の 6 県  
と玄菟郡の 1 県が楽浪郡に編入された。これを嶺東七県(日本海側)  
といい嶺東 7 県を管轄する軍事組織として東部都尉が置かれた。

後漢光武帝が中国統一事業の過程で 30 年には楽浪郡を接收してい  
る。その年(30 年)のうちに後漢は嶺東 7 県を廃止して、原住民の濊

人を県侯に任命して独立させている。313年には高句麗に滅ぼされ、後に高句麗は楽浪郡の跡地に遷都した。楽浪・帯方の土着漢人達は高句麗・百済の支配下に入った。

真番郡・臨屯郡は設置と廃棄以外の記事は正史には見当たらない。イメージとしては、馬韓が真番郡辰韓が臨屯郡であるが根拠はない。もう少し北で現在の北朝鮮の中かもしれない。

Wiki「真番郡」では

15県からなり、郡治が置かれた霽県の位置は長安を去ること7,640里という。管轄する領域の範囲は諸説があって確定していない。前82年(始元5年)に真番郡は廃止された。

Wiki「臨屯郡」では

15県からなり、その境域はほぼ現在の江原道に該当すると考えられている。郡治の置かれた東曺県(現在の韓国江原道江陵市)は長安を去ること6,138里という。前82年に15県中の9県は廃止となり、残りの6県と玄菟郡の夫租県を合わせた7県は楽浪郡に編入され、臨屯郡は消滅した。



Wiki「帯方郡」では

後漢の末、中平6年18に中国東北部の遼東太守となった公孫度は、後漢の放棄した朝鮮半島へ進出、楽浪郡を支配下に置いた。その後を継いだ嫡子・公孫康は、楽浪郡18城の南半、屯有県(現・黄海北道黄州か)以南を割いて帯方郡を分置した。その正確な時期は早ければ建安9年204頃かともされる。「是より後、倭・韓遂に帯方に属す」という朝鮮半島南半の統治体制を築く。公孫康はほどなく魏の曹操に恭順し、その推薦によって後漢の献帝から左將軍・襄平侯に任ぜられ、帯方郡も後漢の郡として追認された。

公孫康の死後、その子・公孫淵が幼いために公孫康の実弟・公孫恭が後を継ぎ、後漢の献帝から禅譲を受けた魏朝の文帝(曹操の子・曹丕)により、車騎將軍・襄平侯に封じられた。しかし、太和2年22成長した公孫康の子の公孫淵は叔父・公孫恭の位を奪い取り、魏の曹叡(明帝)からの承認も取りつけて揚烈將軍・遼東太守に任ぜられる。公孫淵は、祖父以上に自立志向が強く、景初元年237反旗を翻して独立を宣言。遼東の襄平城で燕王を自称するにいたる。帯方郡も楽浪郡もそのまま燕に属した。

翌年238魏の太尉・司馬懿の率いる四万の兵によって襄平城を囲

まれ、公孫淵とその子・公孫脩は滅びる。帯方郡はこれにより魏の直轄地となる。

泰始元年 265 に魏の重臣であった司馬炎(懿の孫、後の晋の武帝)が魏の曹奐(元帝)から禅譲を受けて晋朝を興した。この時代、帯方郡に属する県は、帯方・列口・南新・長岑、提奚、含資、海冥の7県であった。

建興元年 313 遼東へ進出した高句麗が南下して楽浪郡を占領すると、朝鮮半島南半に孤立した帯方郡は晋の手を離れ情報も途絶した。元の帯方郡や楽浪郡南部に残された漢人の政権や都市は、東晋を奉じて5世紀初頭までの存続が確認されているが、5世紀前半には百済によって征服され、5世紀後半に入ると南下した高句麗が百済を駆逐して支配下へ置いた。

帯方郡衙の比定地については諸説が挙げられているが、このうちの、黄海北道鳳山郡沙里院にある唐土城を帯方郡治に比定する説を採りたい。

## 5.6. その他の東夷諸国

東夷伝では、扶余・濊・小水貊・沃沮・肅慎挹婁・勿吉・靺鞨などの国も書かれている。これらの国々は日本の古代史に直接の関与は殆どない。扶余に関しては正史の記事もある程度あり興味あるが、文章の難しい風俗の記事も読む必要があり、踏み込めないでいる。ここでは、Wikipedia の記事の抜粋引用と正史の記事から概略をつかむことを目標とする。興味ある記事で、訳しきれない記事も引用していくが、実際には、今後の考察のメモである。

なお、扶余以外は訳は付けないことにする。

**扶余** に関する記事を見ていく。

Wiki「夫余」建国以前では

夫余が建国する以前のこの地には濊族が住んでいたと思われ、松花江上流の弱水(奄利大水、現拉林河)を渡河南進して夫余を建国する以前の慶華古城(濊城、前漢初期には存在、黒龍江省賓県)も発見されている。

後漢書では、

夫餘国 在玄菟北千里 南与高句骊 東与挹婁 西与鮮卑接 北有弱水  
地方二千里 本濊地也

夫余国は玄菟郡の北 1000 里に在り、南は高句麗と、東は挹婁と、西は鮮卑  
とそれぞれ接する。北には弱水がある。2000 里四方で、本は濊の地である。

初 北夷索離國王齧行 其待兒于後妊身 王還 欲殺之 侍兒曰 前見天  
上有氣 大如鷄子 來降我 因以有身 王囚之 後遂生男 王令置于豕牢  
豕以口氣噓之 不死 復徙于馬蘭 馬亦如之 王以為神 迺聽母收養 名  
曰東明 東明長而善射 王忌其猛 復欲殺之 東明奔走 南至掩淲水 以  
弓擊水 魚鱉皆聚浮水上 東明乘之得度 因至伏餘而王之焉

(この記事は、今は訳せない。引用が必要となるころには、訳せるかもしれな  
い。)

以六畜名官 有馬加 牛加 狗加 其邑落皆主屬諸加

官名には六畜を用いている。馬加・牛加・狗加がある。村落はどれかの加に  
属する。

建武中 25-56 夷諸國皆來獻見 東夷の国々がみな朝貢してきた。

建武二十五年 49 夫餘王遣使奉貢 夫餘王が使いを派遣し朝貢した。

至安帝永初五年 111 伏餘王始將步騎七八韃人寇抄樂浪 殺傷吏民 後  
復歸附

夫余王は7・8千人で楽浪郡を侵したが、後に復歸した。

**永寧元年 120 迺遣嗣子尉仇台詣闕貢獻 天子賜尉仇台印綬金綵**

迺は嗣子の尉仇台を派遣し朝貢した。帝は尉仇台に印綬金綵を与えた。

**順帝永和元年 136 其王來朝京師**      その王は京に朝貢した。

**桓帝延熹四年 161 遣使朝賀貢獻**      使いを派遣し年賀の朝貢をした。

**永康元年 167 王夫台將二萬餘人寇玄菟 玄菟太守公孫域擊破之 斬首  
纒餘級**

王の夫台は二萬餘人で玄菟郡を寇した。玄菟郡の太守の公孫はこれを撃破し、千余人の首級をあげた。

**至靈帝熹平三年 174 復奉章貢獻**      また朝貢してきた。

三国志では

**夫餘在長城之北 去玄菟千里 南與高句麗 東與挹婁 西與鮮卑接 北  
有弱水**

夫余は頂上の北で、玄菟郡から 1000 里のところにある。南は高句麗、北は挹婁、南は鮮卑と接する。北には弱水がある。

**國有君王 皆以六畜名官 有馬加 牛加 豬加 狗加 大使 大使者 使者  
邑落有豪民 名下戸皆爲奴僕 諸加別主四出**

国には君王がいる。六畜を官名にあてている。馬加・牛加・豬加・狗加・大使・大使者・使者がある。村落には豪民がいて、皆を下戸とよび、奴僕として

いる。諸加の別主は四方に出ている。

**夫餘本屬玄菟 漢末 公孫度雄張海東 威服外夷 夫餘王尉仇台更屬遼東 時句麗 鮮卑強 度以夫餘在二虜之間 妻以宗女**

夫餘はもともと玄菟郡に帰属していた。公孫度が海東に勢力を伸ばしたとき、夫餘王の尉仇台は遼東郡に帰属した。このとき、句麗と鮮卑は強大であった。度は夫餘を二国の間においた。宗女を娶った。

**尉仇台死 簡位居立 無適子 有孽子麻餘 位居死 諸加共立麻餘 牛加兄子名位居 爲大使 輕財善施 國人附之 歳歳使詣京都貢獻**

尉仇台が死に、簡位居が立った。簡位居は適子がなく、孽子の麻餘がいた。諸加は麻餘を共立した。・・・

**正始中 240-249 幽州刺史母丘儉討句麗 遣玄菟太守王頎詣夫餘 位居遣大加郊迎 供軍糧**

幽州刺史の母丘句麗を討つことを検討した。玄菟郡の太守王頎を夫餘に派遣した。位居は大加を郊外に遣わし、軍糧を供した。

**麻餘死 其子依慮年六歳 立以爲王**

麻餘が死に、其子で六歳の依慮が王となった。

**其印文言 濊王之印 國有故城名濊城 蓋本濊貊之地 而夫餘王其中自謂亡人**

その印には濊王之印と書かれていた。国には濊城と呼ばれている故城があっ

た。ここはもと濊貊の地で、夫餘王はその中で、自ら亡人と謂った。

夫余の王は

迺 → 尉仇台（夫台） → 簡位居 → 麻餘 → 依慮

と継がれている。

百濟王の姓が餘であること、中華人民共和国吉林省松原市に扶余市があること、大韓民国忠清南道に扶餘郡があることを指摘しておく。

濊 に関する記事を見ていく。

Wiki「ワイ人」では

濊は、三国志やなどに記されている古代民族。現在の黒龍江省西部・吉林省西部・遼寧省東部から朝鮮半島北東部にかけて、北西  $\sim$  南東に伸びる帯状に存在したとされる。濊貊は、古代の韓国・北朝鮮の種族名で朝鮮半島北部と中国の東北部に住んでいた韓国・北朝鮮の根幹となる民族の一つを見ている。しかし、まだ様々な見解が示されている。

濊北與高句驪 沃沮 南與辰韓接 東窮大海 西至樂浪 濊及沃沮 句驪  
本皆朝鮮之地也（後漢）

昔武王封箕子于朝鮮 箕子教以禮義田蠶 又製八條之教 . . . 其後四  
十世至朝鮮侯準自稱王 漢初大亂 燕 齊 趙人往避地者數萬口 而燕  
人衛滿擊破準 而自王朝鮮 傳國至孫右渠（後漢）

この武王は周の武王である。

元朔元年 濊君南閭等畔右渠 率二十八萬口詣遼東內屬 武帝以其地  
為蒼海郡 數年迺罷（後漢）

至元封三年 滅朝鮮 分置樂浪 臨屯 玄菟 真番四郡（後漢）

至昭帝始元五年 罷臨屯 真番 以 併樂浪 玄菟 玄菟復 徙居句驪 自  
單單大領已東沃沮 濊貊悉屬樂浪（後漢）

後以境土廣遠 復分領東七縣 置樂浪東部都尉（後漢）

建武六年 省都尉官 遂棄領東地 悉封其渠帥為縣侯 皆歲時朝賀（後  
漢）

無大君長 其官有侯 邑君 三老 耆舊自謂與句驪同種 言語法俗大抵  
相類（後漢）



自單單大山領以西屬樂浪 自領以東七縣 都尉主之 皆以濊爲民 後省  
都尉 封其渠帥爲侯 今不耐濊皆其種也 漢末更屬句麗 (三)

小水貊 に関する記事は次のみである。

句驪一名貊 有別種 依小水爲居 因名曰小水貊 齣好弓 所謂貊弓是  
也 (後漢)

沃沮 に関する記事を見ていく。

Wiki「沃沮」では、

沃沮は、紀元前 2 世紀から 3 世紀にかけて朝鮮半島北部の日本海  
に沿った地方 (現在の咸鏡道付近) に住んでいたと思われる民族。三  
国志や後漢書では東沃沮と表記される。

三国志では、北東は狭く西南に広い、高句麗の蓋馬大山(長白山脈)  
の東から海岸までに及び、北にユウ婁・夫餘と、南に濊貊と接し、そ  
の言語は高句麗と大体同じで時に少し異なると記される。

沃沮という独自の国家があったのではなく、前漢の玄菟郡の夫租

県(現在の咸鏡南道の咸興市付近)にいた濊貊系種族を指すものと考えられており、同じく濊から分かれた夫余・東濊や高句麗とは同系とされている。

東沃沮在高句麗蓋馬大山之東 東濱大海 北與挹婁 夫餘 南與濊貊接  
其地東西夾 南北長 可摺方韃淠 (後漢)

東沃沮在高句麗蓋馬大山之東 濱大海而居 其地形東北狹 西南長 可  
千里 北與挹婁 夫餘 南與濊貊接 (三)

其言語與句麗大同，時時小異 (三)

毋丘儉討句麗 句麗王宮奔沃沮 遂進師擊之 沃沮邑落皆破之 斬獲首  
虜三千餘級 宮奔北沃沮 北沃沮一名置溝婁 去南沃沮八百餘里 其俗  
南北皆同 與挹婁接 (三)

挹婁・肅慎 に関する記事を見ていく。

Wiki「ユウ婁」では、

挹婁は、後漢から五胡十六国時代（1世紀から4世紀）にかけて、  
外満州付近に存在したとされる民族。

挹婁 古肅慎之國也 在夫餘東北韃餘溼 東濱大海 南與北沃沮接 不  
知其北所極（後漢）

挹婁在夫餘東北千餘里 濱大海 南與北沃沮接 未知其北所極 其土地  
多山險 其人形似夫餘 言語不與夫餘 句麗同（三）

東夷飲食類皆用俎豆 唯挹婁不 法俗最無綱紀也（三）

及武王滅紂，肅慎來獻（後漢）

康王之時 肅慎復至（後漢）

東夷有肅慎之貢（三）

肅慎氏一名挹婁 在不鹹山北 去夫餘可六十日行 東濱大海 西接寇漫  
汗國 北極弱水（晋）

周武王時 獻其楛矢 石磬 逮于周公輔成王 復遣使入賀（晋）

至武帝元康初 復來貢獻 元帝中興 318 又詣（晋）

勿吉 Wiki 「勿吉」では

勿吉は、中国の南北朝時代に、高句麗の北から満州地域に住んでいた狩猟民族で、現在の松花江から長白山一帯に居住していたと思われる。肅慎、挹婁の末裔で、唐代における靺鞨の前身である。

靺鞨 Wiki 「靺鞨」では

靺鞨は、中国の隋唐時代に中国東北部、沿海州に存在した農耕漁労民族。南北朝時代における勿吉の表記が変化したものであり、肅慎、挹婁の末裔である。16部あったが、後に高句麗遺民と共に渤海国を建国した南の粟末部と、後に女真族となって金朝、清朝を建国した北の黒水部の2つが主要な部族であった。

## Part II

|                    |     |
|--------------------|-----|
| Part II 序          | 2   |
| 4. 韓               | 4   |
| 4.1. 韓の記事          | 8   |
| 4.2. 馬韓            | 17  |
| 4.3. 辰韓            | 23  |
| 4.4. 弁辰            | 30  |
| 4.5. 辰王・辰国         | 35  |
| 4.6. 韓と三韓の王        | 38  |
| 5. 東アジア概観（中国と東夷諸国） | 41  |
| 5.1. 中国概観          | 41  |
| 5.2. 東胡と月氏         | 62  |
| 5.3. 東夷諸国          | 68  |
| 5.4. 朝鮮の王朝         | 72  |
| 5.5. 朝鮮四郡          | 79  |
| 5.6. その他の東夷諸国      | 91  |
|                    | 101 |